

Tsukuba

COMMUNICATIONS

Winter

- 8 特集 アーカイブズ設置準備室
- 10 聴 大石和彦 教授
- 12 OB&OG 平岡和徳 氏
- 14 学内組織紹介 体育センター
- 16 名物先生登場 恒次律枝 看護師(附属久里浜特別支援学校)
- 18 Sports Club 体操部
- 20 Art & Culture 社会福祉研究会
- 22 Homeland ナイジェリア連邦共和国
- 24 TOPICS
- 30 リレーエッセイ
- 32 茗溪会・紫峰会
- 34 新聞掲載・テレビ放送一覧
- 35 イベントカレンダー



三菱電機株式会社 執行役副社長
ビルシステム事業本部長
宗行満男氏 × 大田友一
副学長・理事



企業がエンジニアに求めるもの

三菱電機株式会社 執行役副社長
ビルシステム事業本部長

副学長・理事

宗行満男氏 × 大田友一

横から縦のインフラへ

大田: 今日はお忙しいところありがとうございます。この対談にはいろんな方に登場していただいています。エンジニア出身で経営のトップ層になった方は初めてなんです。私もエンジニア出身ですし、そういう経歴の方のお話は、学生の参考にもなると思います。

宗行: 大田さんに、60歳過ぎたんだから思い出作りにしようじゃないかと言われ、軽はずみにも引き受けてしまいました。38年も会社にいますから、思うところなどをお話できればと思います。

大田: 宗行さんとはかなり長い付き合いで、18才の時からです。

宗行: 僕ら京都大学の電気の同窓生で、1968年でした。その時同じクラスで、大勢集まった中でたまたま近くにいた7、8人で話し始めた中の一人が大田さんであり僕だった。この仲間は今でも付き合いがあります。特に大田さんと僕は、当時、家が近所だったんです。試験の前には、よく教えてもらいに行きました。

大田: 僕は修士からドクターに進んだんだけど、宗行さんは修士を修了して三菱電機に入られたんですよね。なぜ三菱電機を選んだんですか。

宗行: 修士を修了したとき、当時人気の

あったコンピューターがらみの仕事をしたいという気持ちもありましたが、あんまり専門性に自信がなかったから、会社選びにこだわりはありませんでした。結局、地縁みたいなもので、関西に主力工場の多い三菱電機を選んだんです。人を大事にするギスギスしていない雰囲気の会社だと言われていたのも、魅力に感じました。

大田: 最初の配属が伊丹でしたね。

宗行: 研究所に行こうという考えはありませんでした。配属先は、必ずしも希望ではなかったんだけど、兵庫県の伊丹製作所という重電の工場で、結局そこで電車を動かすモーターの開発や設計の仕事を中心に27年間過ごしました。重電に関する勉強は大学で特にしていませんでしたが、僕は電車好きだったから自分には合っていたと思います。

大田: 実は、僕も鉄っちゃんだったんですよ(笑)。

宗行: 2001年に東京の本社に転勤になって、交通関連の機器やシステムなどを担当し、その後、経営企画室を経て、4年前からはエレベーターやエスカレーター、セキュリティ、省エネシステムなどビルシステムの事業を担当しています。横に移動する交通機関から縦に移動する社会インフラへと、そういう技術に関わり続けてきたという感じです。

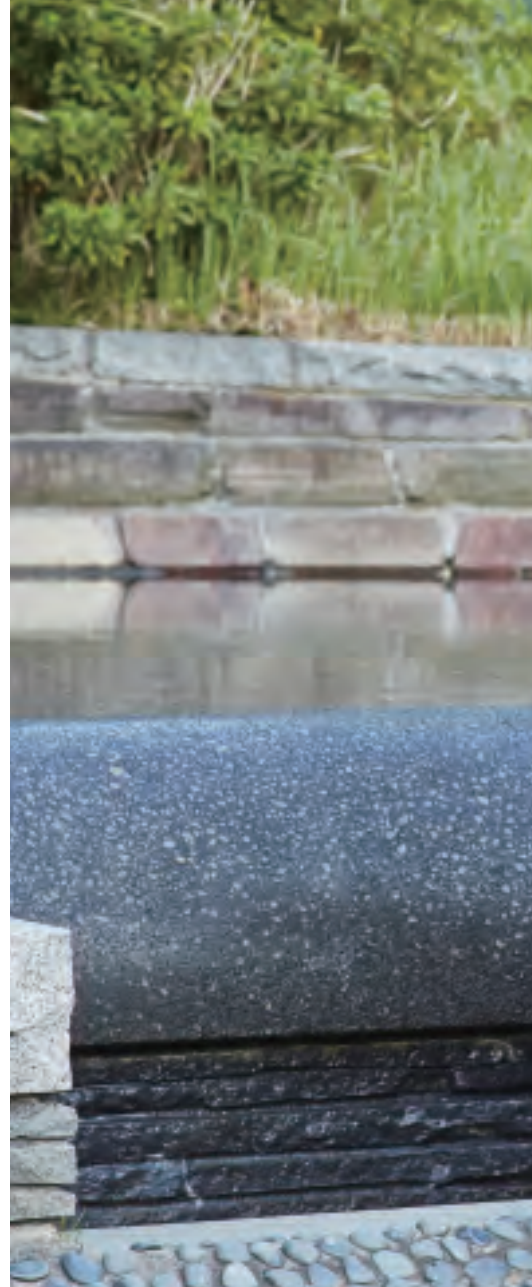
組織の求心力を高める 基本理念

大田: 企業経営に関わってみて、何か思うところはありますか。

宗行: 三菱電機は総合電機と言われてるけど、よくわからないと言う事もよく聞きます。電力、鉄道、昇降機、通信、宇宙、家電もあるし、ファクトリーオートメーションや自動車の電装品、ITソリューション、いろいろな事業をやっています。そして、社内の求心力を上げていくためのコーポレートステートメントとして「Changes for the Better」を掲げています。常により良いものを求めて変化しようということです。

大田: それはいつごろから使っているんですか。

宗行: 2001年にコーポレートステートメ





ントとして、正式に制定しました。ベストでなくベター。初めはベストと言わないところが変だと思っていたけど、ベストと言うと、それで努力が打ち止めになってしまふんです。ベターだと、より良いものを求めて継続的に努力する事になります。今ではなかなかいい言葉だと思っています。

大田:三菱グループには「三綱領」という経営理念もありますね。

宗行:「所期奉公・処事光明・立業貿易」。今の時代でいえば「社会貢献・コンプライアンス・グローバル」っていうことになります。4代目社長の岩崎小彌太が1930年に制定しました。戦前の時代に、経営は利潤を越えた目標を持つべきであるということを唱えていて、今でも全く色褪せていません。グループ全体の価値観、それをベースに活動

をすることで企業価値、ブランドへの信頼感が醸成されていくのだと思います。企業活動というのは、成果や貢献が一過性のものではだめで、継続性が必要です。そのためにも底に流れる基本理念を持つというのは非常に大事だと思うんです。

大田:筑波大学の建学の理念もすごくいいですよ。40年前の作文とは思えない。

宗行:国内的にも国際的にも開かれた大学、ということで基本的な目標が5つ書いてあるけど、どれもすばらしいですね。やっぱりこういうのがあるから、筑波大学のブランドっていうのがあるんじゃないですか。基本的な理念がしっかりしていると、大きくずれていかないですね。

大田:東京教育大学までの長い歴史プラス今の40年、確かにそういうのを目指し

て歩んできたなと思います。ブランディングということでは、筑波大学も「IMAGINE THE FUTURE.」というスローガンを掲げて力を入れています。4年目になります。メッセージングもあります。

宗行:困った時やつらい時にこういう言葉を思い出すと、決断しやすくなるとか、違った方向に行かないということもあるんじゃないでしょうか。

大田:さっきの三綱領の、社会貢献・コンプライアンス・グローバルっていうのは大学にもそのまま当てはまりますね。大学は、社会への貢献ということは今まであまり意識していなかったかもしれない。もちろん学生を育てるということはしていたけれど、社会がどういう人材を要求しているのかということをもう少し見ないといけないなと思います。



むね ゆき みつ お
宗行 満男 氏

三菱電機株式会社 代表執行役 執行役副社長 ビルシステム事業本部長

大阪府出身	
1974年3月	京都大学大学院工学研究科修士課程修了
1974年4月	三菱電機株式会社入社
1987年10月	伊丹製作所 電鉄システム部 電動機設計課長
1998年6月	系統変電・交通システム事業所 電鉄システム部長
2002年4月	社会インフラ事業本部 交通事業部長
2005年4月	常務執行役社会システム事業本部長 兼ITS推進本部長
2008年4月	上席常務執行役経営企画室長
2010年6月	代表執行役 執行役副社長、ビルシステム事業本部長

ガラパゴスエレベーターの世界展開

大田: せっかくだから、エレベーターの事業について教えてください。

宗行: 昇降機、主にエレベーターとエスカレーターのことです。安全・安心・快適を届けるというのがミッション。新しいものを作り設置して便利に使ってもらうのと、古くなっていくものを常に良い状態に保つ、そんな仕事です。いまやそれがなかったら社会生活が成り立たないようなところに来ていますから、誇りをもってやっています。社内でもいちばんグローバル化が進んでいる事業で、現在、92か国でエレベーターを使ってもらっています。

大田: それは本当にグローバルですね。アジア、アフリカ、どの辺が多いのですか？

宗行: やっぱ中国やASEANが中心で

すが、欧州とか中南米、アフリカもあります。92番目、直近はアフリカのアンゴラでした。その前がガーナ、ルーマニア、ナイジェリア。当社にもなかなかたぐいまいるんです。

大田: そういうところでも保守の技術を持った人を養成したりするんですか。

宗行: 現地へ教えに行つて、育成します。現在、132人が海外に赴任して活躍しています。出張で行く人も併せると、昇降機だけでかなりの人数が海外に行っています。僕も35か国ぐらい行きました。

大田: なかなかそんなに行けませんね。国によって違いはありますか？

宗行: 社会通念がみんな違います。日本のような極めて厳しい品質や安全を求めるところもあるし、エレベーターなんか乗場とかごの間に段差があるのが当たり前とか、ガタガタ揺れながら上下するとか。日本

「仕事は縁。縁を大事にして頑張るしかない」

と同じ製品を持って行っても立派すぎて売れないこともあります。これは日本中のメーカーが苦労していると思います。携帯電話がガラパゴスと言われたけれど、多かれ少なかれ、日本の製品はそういうところがあると思う。もちろんそのまま通用するプレミアムな領域もたくさんあるけど、もう少し現地に合わせた仕様のものを作って、ボリュームゾーンにも拡げようとしています。ガラパゴス島にもあるんですよ、うちのエレベーター。ガラパゴスにガラパゴスのエレベーター(笑)。

大田: それはホテルですか？

宗行: そうですね。あと、ミャンマーのヤンゴン市内にあるシュエダゴンパゴダっていう有名な寺院には、ものすごく長いエスカレーターがあり、それは裸足で乗るエスカレーターです。寺院そのものが裸足でしか入場できないのですが、三菱のエスカレーターで拝殿まで上がっているような仏像に礼拝するようになっています。でも、エスカレーターに裸足で乗ることなんてないから、裸足で聞いたときはどうしようかと思いました。

大田: 裸足で乗るための特別な工夫があるのですか？

宗行: それがなかなかありません。乗り口に注意を喚起する人をつけたり、立て看板を立てたり、挟まりにくいような工夫はしています。でも日本の駅みたいに、大勢乗って走るような人はいませんので、大丈夫です。

大田: らせんのエスカレーターもありますね。つくばセンターに万博の頃にできて、みんなで乗りに行きましたよ。もうなくなったのかな。

宗行: スパイラルエスカレーターの事ですね。つくば博の開催された1985年に日本第1号として設置したものです。あれは世界中で三菱電機しかできないエスカレーターです。見栄えや豪華さを出すところに買ってもらっています。ラスベガスとかドバイとか。最近上海のお客様からも多くのスパイラルの注文を頂きました。また、今建設中の上海中心大厦というビルには、分速1080mの世界最高速で上昇するエレベーターを納入する予定です。いろいろやってるんですよ。

グローバル人材は「心・技・体」

大田:最近は大学でもグローバル人材の育成とよく言いますが、グローバル人材と聞いて、どういう人材を思い浮かべますか。

宗行:当社でもグローバル人材っていう言葉が結構出ます。でも考えてみるとどんな定義なのか。当社ではよく、「心・技・体」と表現しています。「心」っていうのは勤務地に拘泥しないこと。国内外どこでも行く、どこでも力を発揮するという心構え。「技」はもちろん専門性の高さ。スキルや技術がちゃんとしていないと海外で仕事をして誰もついてきてくれません。英語も含まれるかもしれません。「体」、タフということ。心身とも健康なことです。もちろん、論理的にものごとが把握できるとか、文化も含めて日本のことを幅広く知っている、そういうものがあってこそグローバルに通用する人材だと思います。

大田:心と体か。これはなかなか大学で育てるのは難しいですね。

宗行:もうひとつ、課題を与えられたら解決できる優秀な人っていうのはわりと多い。ただ、課題を見出す、どこが問題なのかという、問題を課題に読み替えることができるの方が望ましいと思っています。どうやったらこういう人材を育てることができるのでしょうか。

大田:小さいころから考えさせるような教育をやっていくということでしょうか。社会に出れば答えのない問題ばかり。解が複数あるとか。正解が一つなんて、学校の試験ぐらいしかない。正解のないような問題に立ち向かえる能力というのは、普段からしっかりと考えさせるような授業をやっていくのが必要なんだろうと思います。大学でも、卒論や修論で、自分で新しい研究に取り組むときに、戸惑う学生と逆にイキイキしてくる学生がいます。これは、試験の成績とは必ずしも関係ありません。今まで誰もやっていないことをやるわけですから、道はひとつではないし、どれがベストかわからないような中で、壁を乗り越えるのか回り道するのか選ばなければならない。

宗行:入社試験でそういうことを見極めるのは難しいですね。

大田:授業はたくさんを相手にする。一方向の授業ではいかん、なんていうけど、そんなハーバードの授業みたいな

「インタラクティブに考えさせる場が重要です」



おおた ゆういち
大田 友一

筑波大学副学長・理事

大阪府出身

1977年3月

京都大学大学院工学研究科博士課程単位取得退学

1978年4月

〃 工学部助手

1981年8月

筑波大学電子・情報工学系講師

1987年7月

〃 電子・情報工学系助教授

1992年8月

〃 電子・情報工学系教授

1999年4月

〃 機能工学系教授

2009年4月

〃 大学院システム情報工学研究科長

2011年4月

〃 システム情報系長

2013年4月

〃 副学長・理事

こと、しょっちゅうはできない。実際に学生にインタラクティブに考えさせるような場というのは、やっぱり卒業研究や修士論文の指導だとか、そういうところだと思う。ほんとに1対1で、教員の時間も、ものすごく割いています。そういう意味ではコストが一番かかっているところですね。

宗行:確かにそうですね。これこそ考えさせる教育ですね。

大田:大学の役割は人づくり。文科大臣の「日本人としてのアイデンティティを持ちつつ高付加価値を創造し国内外で活躍・貢献できる人材の育成に向けて」という教育戦略があって、そういう国の方針に沿って、グローバル化とかイノベーションが創出できる人材の育成とか、社会との連携、それに社会人の学び直し、そういう仕組みをちゃんとつくってしっかりやっていく大学を支援しますよ、と。大学もなかなか大変です。

産学連携は「次の次の次」に向けて

大田:いろんな仕事をしていく上で、大学で学んで役に立ったこと、学び足りなかったことっていうのはありますか？

宗行:ほとんど困ったことばかり。みんなに助けてもらってようやくここまでやってきたという感じです。学校で学ぶ期間はすごく短いから、専門性を高めるっていうのはなかなかできないしね。むしろ基礎的な学問、電気っていうと、電気回路・電磁気学・計測、機械だと材料力学とか、こういうのはいろんなことの基礎になるからもっと一生懸命やっておけばよかったと思いました。

大田:大学で学んだことは、もちろんベースにはなるけど、実際の仕事の場面になったら新しく学ばないといけないですね。

宗行:会社に入って最初に感じたのは、大学で人気のあった、はやりの学問と、今実際に社会で中心的に使われている分野とはちょっと違うなということでした。とりわけ伊丹の工場は、変圧器とかモーターなんかを作っていましたから。こんなものがまだ世の中ではきらきら輝いているんだと、妙に感心したことを覚えています。原理的に技術は古くても、製品やモノづくりとして見たとき、いくらでもまだまだやることあって、その改良とか工夫が中心になってるなと思いました。

大田:大学もその辺のことは意識していて、数学とか工学の基礎をやる時に、これは実際にどういうところで役に立つのか、どういうふうに使われているのか、イメージを持たせてから教えるようにしています。

宗行:高性能なものを一つ二つ作ることはできるんだけど、それをたくさん作る、そして長くしっかり働かせるというのは簡単じゃない。企業が育てていかなければならない技術や製品、活動っていうのはそういうことを念頭に入れてやっていくものだと思うんです。一方で世の中の技

術は確実に進化している。考えてみると、学生が飛びついたような先進的な学問は、時間の経過とともに技術の進化につながって製品化されて次の中心にだんだんシフトしていく。大学というのは時代の先駆けの研究や教育をするという役割があるんだなと思います。

大田:僕の話になっちゃうんですが、大学院では画像処理とかコンピュータービジョンの研究をしました。その研究目標を具体的にいうとロボットの目をつくるということです。まさに最近、その成果が、自動運転の自動車とか、身近なところに出てきています。さっき長い年月を経て世の中に出てきていると言った通り、40年かかっていますね。

宗行:研究開発の観点でいうと、当社では、「次」・「次の次」・「次の次の次」、っていうコンセプトがあって、「次」っていうのは短期、次の製品。工場にも開発の人がいるから彼らが今の延長線上でやっていく。中期的なことは「次の次」。研究所主体で次の時代の製品開発をする。長期的にはもっと大きいジャンプが

必要で、それが「次の次の次」。これは技術の開発。このあたりが産学の連携ということになっていくのでしょうか。

大田:「次の次の次」の種をまくってということですね。

宗行:そうですね。製品よりも技術の開発ということになる。大学と一緒に深くやっていく。いろんな組織が連携したオープンイノベーションみたいな大きな取り組みが、これからの日本でもっとたくさん出てきたらいいと思うし、その成果を受け取る我々、産業界が元気がないといけない。企業が元気よくやって、その元気でもって研究成果の事業化を活発にやっていく、それでますます産学連携の取り組みを増やしていく、それが成長戦略にもなるんじゃないかと思います。大学から見たら産学連携ってどうですか。

大田:大学で研究した、将来的に実用化できそうな先端技術のネタみたいなものが、なかなか世の中に出ていかないところがありますね。企業側から見るとまだまだ儲けのネタにはならないような段階なんじゃないかな。興味は持つけど、その先に



進まない。「技術の死の谷」っていうのかな、そこをうまく乗り越えるには、大学側の努力も必要かもしれないけど、企業の側も、もうちょっと踏み込んで検討することがあっていいと思います。

宗行: だんだん技術が高度化して、それを事業化するのにお金もたくさんかかるし、そういう仕掛けが大きくなってきているのかな。やっぱり企業が元気にならないと、そういうところが回っていかないとね。

大田: 世の中全体が元気にならないとね。結局そういうところに落ち着くのかな。

もっと枠からはみ出そう

宗行: 筑波大学は学業とスポーツの両方が有名で、ブランドがあると思うんです。レベルが高いという認識は持っています。三菱電機は関西の工場が主力だから地域性もあるけど、筑波大学からもっと当社を希望してくれてほしいなと思います。筑波大学の理念の下でしっかりと学んでこられた学生さんは、当社のグローバル人

材、心・技・体にぴったりだと思うんですよ。ですから文系理系といわず、たくさん来て力を発揮していただいて、当社の成長、社会のために活躍してほしいと思います。今日は、こうやって筑波大学に寄せていただいたので、来年は是非、筑波大から当社にたくさん入社していただきたいと思うのですが、逆にこの原稿を読まれて当社の人気下がったとしたら困ってしまうなあ。

大田: 最後に若者へのメッセージを。

宗行: 大学は学問させていただくところでもあるし、人づくりのところ。私も、もう38年前ですが、なんとなくぼんやりと過ごしてしまったなど、ちょっと後悔してるとです。それでも、大田さんみたいな良い友達もできたし、やっぱり視野が広がったんだろうと思うんです。社会人の基礎は作ってもらえた。大学はそういうところであってほしいと思います。大学時代は何でも試みることができるし、社会もそれを許してくれる、素晴らしい時期だと思うので、私の反省も込めて、なんでもアクティブにやってみたらいいと思います。こ

れからの時代、僕らの時代よりもはるかにグローバル化しているし、いろんな世界も広がっている。一方で難しいことも増えてくると思うけれど、語学、スキルそういうものを学んでそれを最大限生かす。世界を相手にして、それこそ「IMAGINE THE FUTURE.」ですね、将来をイメージして熱い思いを持ち続けているんなことに挑戦してほしいと思います。

大田: 学生の間って、100%自分のために時間を使える時期ですよ、それは学生の時しかない。僕自身がそのころ時間を有効に使っていたかという、決してそんなことはないんだけど。最近の学生を見ていると、僕らの頃より真面目だね。別に真面目でいいんだけど、もう少し枠からはみ出していろんなことやってほしいという感じはしますね。

宗行: それはありますね。あまり良い表現ではないかもしれないけれど、ちょっといい加減なところもあって良いし、多少枠からはみだす時もあるって良いのかなと思います。

大田: それでもお互いこういう風になるわけだから。

宗行: 振り返ってみると、会社に入ってから予定通りにいかない事の方がはるかに多かった。うまくいかなかったことばかり思い出します。よく失敗もしたし、お客さんにも迷惑かけたし。せめてその時は最高の対応をしようと思って、なんとかこまできたという感じですね。

大田: 確かに、長い人生、自分がこうやろうと思ってその通りになることは少ない。なんとなく流れてみたいところもありますからね。

宗行: そうですね。どんな仕事になるか、縁としか言いようがない。僕なんか、会社を選ぶ時も、どんな仕事をしようというのも強い気持ちがあったわけでもない。すごく不思議な感じなんだけど、何かの縁でこういう仕事に深くはまった。この年になったからそう思うのかもしれないけど、せつかくの縁だから大事にして頑張るといことしかないのかな。

大田: それは大切なことなのかもしれないね。今日は本当にどうもありがとうございました。



法人文書や歴史資料は 筑波大学アーカイブズ設置準備室へ！

40年+101年の歩みを後世へ！

本学は、新構想大学として開学し、2013年10月に40+101周年を迎えました。さまざまな先進的取り組みを行ってきた本学とその前身を含めた141年の記録は、後世に確実に引き継いでいかなければなりません。そのため、現在、「筑波大学アーカイブズ」の設置に向けて準備を進めています。

大学アーカイブズとは？

大学アーカイブズとは、大学の活動や歴史的事実の記録である公文書等を適正に管理・保存し、公開などの利用に対応する大学の公文書館です。

2011年4月に施行された「公文書等の管理に関する法律」(公文書管理法)は、国民主権の理念により、国および国立大学法人などの独立行政法人等が、組織の効率的運用と国民への説明責任を果たすために、行政文書等の適正な管理や、歴史公文書等の適切な保存および利用など、アーカイブズ(公文書館)の設置を前提として、公文書等の一貫した管理に関する基本事項を定めています。この法律の施行を受けて、本学では、筑波大学アーカイブズ設置検討委員会を設置して審議を行い、実質的には本年度よりアーカイブズ設置準備室を始動させました。平成28年度の筑波大学アーカイブズ設立に向けて活動しています。

筑波大学アーカイブズは、本学に関連する情報の集積・発信機関として、学生や教職員、卒業生にとってアイデンティティ確立の基盤となるとともに、大学のブランド力を高めるための中心的な役割を担う施設になることが期待されています。

大学アーカイブズの担う機能

- ① 歴史資料として重要な法人文書を受け入れ、保存するとともに、目録を作成し、公開などの利用に供する。
- ② 現用の法人文書の管理、廃棄等に関して、専門的・技術的助言を行う。
- ③ 本学の歴史に関する個人または団体等からの資料の寄贈・寄託を受け入れる。
- ④ 法人文書の管理および特定歴史公文書等となった所蔵資料に関する学術的調査・研究を行う。
- ⑤ 展示会その他の手段によって、本学の歴史等に関するさまざまな情報を発信する。
- ⑥ 本学の歴史に関する講義やアーキビスト※養成プログラムに関する講義・実習等の教育支援を担当する。
- ⑦ 筑波大学50年史など、今後計画される大学沿革史の編纂事業とともに、前身校に関する資料の収集を行う。
- ⑧ その他、文書担当職員に対する研修会等、大学アーカイブズとして求められる業務を行う。

資料は捨てる前にアーカイブズ設置準備室に一報を！

アーカイブズ設置準備室では、現在、文書登録の有無、保存期間の長短にかかわらず、本学の前身校に関する資料、筑波研究学園都市への移転関係資料、開学当初の資料、各組織の草創期に関する資料を重点的に収集しています。

寄贈された資料については、とりあえずアーカイブズ設置準備室で保管し、アーカ

イブズ設置後は、アーカイブズにおいて審査を経て順次公開する予定です。

なお、収集の対象は上記の資料に限られません。法人文書や、学類長杯のトロフィー、名誉教授会の芳名録といった記念物、古い写真・音声・映像、研究室の資料、顕著な業績を残した教授の個人資料、歴代学長・副学長関係の資料など、幅広く収集しています。

研究室や各部局で整理し、提供された資料につきましては、そのままの状態でも保管しますが、整理していない状態での寄贈・寄託も受け付けています。耐震改修工事で研究室が移転する等、処分の必要が生じた資料につきましては、廃棄する前にアーカイブズ準備室に連絡してください。準備室の担当者が出向き、資料の分別・収集をします。



重点的に集めている資料

- 東京教育大学等、前身校に関する文書
- 筑波研究学園都市移転に関する文書
- 筑波大学の創設期に関する文書
- 各組織の創設期に関する文書
- 東日本大震災関係の文書
- その他、大学の歴史に関する重要な文書

アーカイブズ設立に向けて

アーカイブズ設置準備室では、資料の収集と並行して、昨年10月、大学内各組織に「法人文書の管理に関するアンケート」を実施し、法人文書の保存状況や、歴史的公文書の有無などを調査するとともに、準備室が重点的に収集している資料の周知徹底を図りました。来年度には、詳細な実態調査を実施し、それに基づいた書架の準備等に取り掛かる予定です。

※アーキビストとは

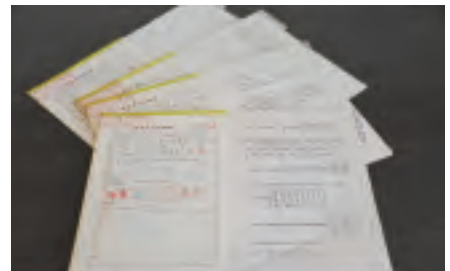
アーキビストとは、永久保存価値のある情報を査定、収集、整理、保存、管理し、閲覧できるように整える専門職員を指す。大学アーカイブズに所属するアーキビストは、資料整理の実務者であるとともに、記録作成から保存、利用までのマネジメントをする管理者であり、歴史学、アーカイブズ学、大学史の研究者という3つの顔を持つ。



本学に残る「軍人援護に関する勅語」



東京教育大学名誉教授懇談会における芳名帳



昭和50年代の原議書

アーカイブズ設置準備室から

公文書管理法によると、国立大学法人が設置するアーカイブズは、国立公文書館等の中の1つに入ることになっています。つまり、国が設置する公文書館ですから、そのためには、政令指定を受けなければなりません。政令指定を受けるためには、施設は基準に達しているか、専門職員を配置しているか、湿度や温度の管理がなされているか、目録が完備されていていつでも閲覧できるかなど、いくつもの条件があります。そのため、本学では、事前準備に3年をかけて万全を期し、アーカイブズ設置後1年以内に政令指定を受けることを目指しています。

大学アーカイブズは、世界の主要大学の90%以上に設置され、アメリカ合衆国では、ほぼ100%の大学に置かれています。日本の国立大学では、東北大学、京都大学、九州大学、名古屋大学、広島大学、神戸大学、大阪大学の大学文書館が政令で指定されており、東京大学でも、来年度の設置を目指して整備中です。国立大学の管理・運営体制の改革に常に先進的に取り組んできた本学ですが、大学アーカイブズに関する限り、立ち遅れているという現状です。

しかしながら、本学では、準備室段階から「文書委託の申合せ」と「廃棄

中野目 徹 教授（人文社会系）

文書への合意」を定めるなど、先進的な制度を整えました。そのような大学は他にありません。新たな公文書管理体制に即した、従来とはタイプの異なる大学アーカイブズを構想し、他の国立大学法人のモデルとなるような施設を目指しています。

公文書は、出版された図書と違って原本が1本しかありませんので、その原本を確実に引き継いでいくことは使命です。また、今後、筑波大学の50年史、100年史等の編纂を円滑に遂行する上でも、筑波大学アーカイブズが大きな役割を果たすはずで、そのためにも、資料提供のご協力をよろしくお願いいたします。

くありません。むしろ最新の問題、例えば、クローン技術の規制は学問の自由を侵害することになるか、というようなテーマを、古典的な視点から議論するところに憲法学の醍醐味があります。哲学の分野で、いまだにソクラテスやプラトンが研究されているのと似ています。

理想的な憲法ならば世界中で共通のものになってもおかしくないようにも思えますが、各国の憲法にはそれぞれの歴史やお国柄が反映されています。そのため、同じ近代立憲主義の下で作られた憲法でも、国によって異なる内容が規定されているのです。それでも、基本的な人権は普遍的な概念であり、最近では、海外の憲法や判例が日本の憲法判例にも引用されるようになってきました。公務員の政治活動への参加や、非嫡出子の相続権の平等化など、それを認めることでもたらされる社会秩序への影響などを、欧米の事例をも参照しつつ、論じることができます。

静かなるビッグヒート

このような手法で営まれる憲法学は、新たな発見やブレイクスルーによつて飛躍的に研究が進むような分野ではありません。現行の憲法の範囲で、その時々々に起こるさまざまな問題の解決となるような解釈を探っていく営みだともいえます。万人が納得できる唯一の正解がない中で、社会の動向なども踏まえて、人々に最も受け入れられる最適な解決策（落としどころ）を提示します。憲法学者の長谷部恭男教授が「憲法学は芸である」と言っていますが、新旧の学説や判例を駆使して論拠を構築する作業は、確かに「一種の「芸」」のようなものかもしれません。

最高裁判所は判例という形で、条文の曖昧な部分に具体的な意味づけをしていきます。それに対してさらに研究者の考察が行われる。そのプロセスには、芸事のような側面はあっても、この社会のしくみを決める熱い議論があります。

法を通して国家を理解する

戦争によって何千何万という人が命を落とす。その戦争は国と国の間でおこります。つまり、国によって人の命が奪われる。そのようなことをしてしまう「国」とは何なのか、中学生の頃に抱いた素朴な疑問が憲法学へ進む原点となりました。国家のルール、国家権力を縛る法が憲法だからです。

法は、条文として存在はしていますが、その意味は観念的なものです。その法によつて、国家が戦争をおこしたり、刑事罰を科したり、税金を徴収したりします。考えてみれば、人の命や財産を奪うという点では、犯罪と何ら異ならないとも言えます。しかし私たちはこれを適法行為として受け入れています。それは私たちが法を通して国家の活動を理解しているからです。法とは無縁に暮らしていると思つても、潜在的に法から逃れることはできないのです。

実は、最高裁判所の裁判官に限つては、内閣に任命されれば司法試験を受けなくてもなることができます。最終的な憲法判断には、より広い知見を反映させることが重要だからです。裁判員制度が導入され、一部の法的判断には市民の知見が取り入れられるようになりましした。難解な議論の多い法の世界ですが、私たちとの距離は近づいています。



聴

大石 和彦 教授 (ビジネスサイエンス系)

国家とは何か 古典的な視点から現代の憲法を読み解く

国の基本的な仕組みを定める憲法。その解釈や改正を巡る議論は折に触れて話題になります。また最近では、選挙や相続などさまざまな格差・不平等に対する憲法判断も社会的な関心事となっています。しかし多くの人にとって、憲法そのものについて学んだり考えたりする機会はなかなかありません。憲法は観念的な存在でありながら、現実の国民生活の基盤となるものです。ビジネスサイエンス系の大石和彦教授は、観念と現実との狭間にある憲法の本質を探究しています。

近代立憲主義と憲法

法によって国家権力を縛る、という近代立憲主義の基本発想に基づいて考えると、人権が保障され、民意を根本においた統治(民主主義)や権力の分立が明確に謳われている日本国憲法は「良い憲法」だと言えることができます。しかし、法というのは社会を動かすソフトウェアのようなもの。人間がプログラミングするのですから、当然「バグ」もあります。憲法にもバグはあつて、規定されていない部分や解釈に幅のある表現が含まれています。

それでも日本国憲法はこれまで二度も改正をされませんでした。国家の基本と

なる法を変えるというのは重大なことです。諸外国では何度も憲法が改正される例もありますが、ほとんどの場合、その内容は手続き規定などの軽微なものにとどまっています。アメリカでは、

200年以上の憲法の歴史の中で20数回の改正が行われたものの、大きな改憲は、南北戦争を経て平等権条項(奴隷制の廃止)を追加したこと、第一次世界大戦後に女性の参政権を認めたことぐらいいしかありません。国民同士が血を流すような惨事や、国を二分するような大論争がない限り、憲法とは原則的に変わらないものだというのが、憲法学の基本的な見方です。

憲法学の作法

憲法学は基本的に「考える」学問です。自然科学のように、データを蓄積して理論を組み立てたり、実験によってそれを検証することはできません。ある説が唱えられると、それが実社会に適用された場合に起こりうる矛盾点などを探して、古典的な学説や過去の判例などをとくに論戦が繰り広げられます。それに耐えて残ったものが通説として定着していきます。これらの通説は、新しいものに淘汰されたり、時代とともに進歩するのではなく、そのまま妥当性が保たれることも少なくありません。ですから、現代の新しい問題に対して何世紀も前の古い学説が引用されることも珍し

おお いし かず ひこ
大石 和彦 教授(ビジネスサイエンス系)

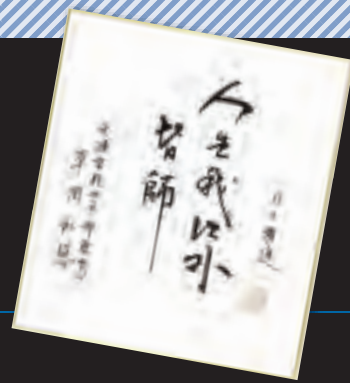
- 1964年 長野市生まれ
- 1983年 長野県立長野吉田高校卒業
- 1990年 東北大学法学部卒業
- 1993年 〃 大学院法学研究科前期2年課程(公法学専攻)修了
- 1993年4月 〃 法学部助手
- 1997年4月 白鷗大学法学部専任講師
- 2000年4月 〃 法学部教授
- 2004年4月 〃 大学院法務研究科(法科大学院)助教授
- 2005年4月 〃 大学院法務研究科(法科大学院)教授
- 2009年9月 筑波大学大学院ビジネス科学研究科法曹専攻教授
- 2011年9月 〃 ビジネスサイエンス系教授



ひら おか かず のり

平岡和徳さん

熊本県立大津高等学校
体育教諭 サッカー部監督



本学をリーグ戦優勝に導いた蹴球部元主将であり、熊本県立大津高校サッカー部顧問として、21年間で40人ものJリーガーを育てた平岡和徳さん。今回は、高校サッカー界の名将として有名な平岡監督にお話を伺いました。

1965年 熊本県生まれ
1988年 筑波大学体育専門学群卒業
1988年 熊本県立熊本商業高等学校 体育教諭/サッカー部顧問就任
1993年 熊本県立大津高等学校 体育教諭/サッカー部顧問就任



— 帝京高校のキャプテンとして、全国高校サッカー選手権で全国制覇を成し遂げました。日本サッカーリーグのクラブはもちろん、海外の監督からも注目されていたそうですが、なぜ筑波大学に進学されたのですか？

筑波大学を出て教員になって欲しいという親の強い希望があったことと、中学生の頃から憧れて、自分のプレーのお手本にしてきた風間八宏さん（現川崎フロンターレ監督）がいらっしゃるということで決めました。

— 筑波大学蹴球部の黄金時代ですね。

僕が大学4年の時には、ヘッドコーチに田嶋幸三さん（現：日本サッカー協会副会長）、フィジカルコーチに西嶋尚彦さん（現：本学体育系教授）。私がキャプテンをして、副キャプテンが長谷川健太（現：ガンバ大阪監督）。田口禎則（なでしこリーグ実行委員会委員長）がいて、2学年下には、井原正巳（現：柏レイソルヘッドコーチ）や中山雅史（現：解説者）がいました。素晴らしいスタッフと充実したメンバーががっちり組み合わさって、4年ぶりのリーグ戦優勝を果たしました。この時のメンバーでJリーガーにならなかったのは、僕ひとりです（笑）。

— 本当に豪華なメンバーです。

ユニバーシアード代表ばかりなのに、なかなか優勝できない。それで、僕がキャプテンになった時に、勝つために、何か筑波大学ならではの新しいことをやろう、ということになりました。

— 具体的にはどのような取り組みをされたのですか？

故・鈴木正成先生には、栄養学の面

からアスリートを変えるという指導をしていただき、自分を管理して、規則正しい生活を送るようになりました。3度の食事の栄養バランスだけでなく、クエン酸が疲労回復物質だということで、ハーフタイムにオレンジジュースを飲むようにしたりもしましたね。そうした食事や生活改善による体づくりと並行して、田嶋コーチはドイツから持ち帰ったサッカーの練習法を、西嶋コーチは、当時は最先端だった、爆発的パワーを作るプライオメトリックトレーニングを取り入れて指導してくださいました。その結果、リーグ戦連覇につながりました。

— 他のメンバーが全員日本リーグに進居中、ご両親の期待に応じて教員になられたのですか？

教育実習に行くまでは、僕も日本リーグに入ろうと思っていました。教育実習で附属駒場高校に行き、小澤治夫先生という素晴らしい先生に出会ったことで、教師の親から譲りうけたDNAが動き始めてしまったんですね。1か月間の実習が終わった頃には、教育現場で活躍することが、元来自分の大きな夢なんだということが明確になっていました。先生に、「君は教師になるべきだ」と背中を押されたことも大きかったです。

— 教員に採用されて最初の赴任先は、熊本県立熊本商業高校でした。

全学年合わせて男子は250人。スポーツ選手のほとんどは野球をやっていて、サッカーは12～3人の同好会でした。とても先が見えない状況でしたが、当時、ラグビーの弱小高校が全国制覇する実話を元にした「スクールウォーズ」というドラマを



やっていたんですね。このような教員がラグビーの世界にいる。であれば、サッカーだってできるはず、というようなモチベーションが生まれて、1年間必死でやりました。すると、うわさを聞きたい選手が集まってきて、2年目には部に昇格。3年目には冬の選手権で県ベスト4に残り、4年目にインターハイ出場を成し遂げたいんです。

— まさに、ドラマのような奇跡ですね！

翌年は、86人の男子生徒のうちサッカー部に52人入ったんですが、それを見ながら、僕は天津高校に転勤になりました(笑)。また1からのスタートで、熊本県大会で優勝するまで3年かかりましたね。天津高校に来て21年、春の選抜のFBS杯チャンピオン大会で1度全国制覇し、インターハイ3位が2回、国体準優勝2回、選手権ベスト8が4回あります。

— 公立高校とは思えない素晴らしい成績です。Jリーガーもたくさん輩出されています。

今年は特に多く、本校出身者がJリーグに7人内定していて、この春で、天津高校からちょうど40人のJリーガーが誕生することになります。

— 銅メダルを取った2013ユニバーシアード日本代表メンバーには天津高校OBが6人いて、ゴールキーパーにいたっては2人も、と聞いています。本学でも、川崎フロンターレ入団が内定した谷口彰悟選手(体育4年)をはじめ、車屋紳太郎選手(体育3年)、若杉拓哉選手(体育2年)が、大活躍しています。選手はどのように集めているのですか？

県立高校なのでスカウトは一切していません。工夫しているのは、中学生が練習にフリー参加できるようにしていることで

す。チームのユニホームを着せて一緒に練習させると、みんな入りたいてい言います(笑)。今、部員は123人。県外から来た子が1割くらいいます。

— 私立高校のスポーツクラスなどに比べると、練習時間が取れないと思いますが？

トレーニングは100分と決めています。終わりを作ることで途中を頑張れる、というのが人間だと思っただけですね。その中でも、それぞれのトレーニングを10分や15分で区切り、必ず「ラスト何分!」と声をかけます。そうすることで、サッカーの上で極めて重要な部分、集中力を高める練習になるんですね。この100分の中で10*。走らせる練習メニューを組み立てています。筑波大学で素晴らしい指導者から学び、作りあげてきたメニューですから、どこよりも高いクオリティーでやっていると思っています。

— 指導する上で心掛けていらっしゃることはありますか？

ウイークポイントより、ストロングポイントをどこまでも成長させることです。ウイークポイントを言い続けると、その時間や空間が嫌いになり、成長力がどんどんマイナスになりますから。好きなこと、できることを徹底的に鍛え上げると、ちょっと苦手なことまで自分でやり始めようとするものです。

— 123人からレギュラーの11人を選ぶのは大変ですね。

自分の信念の中に、「朝、最初にボールを出す子を見る」というのがあります。朝の自主練には、日の出とともに来ていることになっているので、僕は、毎朝5時半頃、一番最初にボールを出す子を見

るために来るんです。それぐらい本気で見ていかないと、11人を選ぶことはできません。

— 今後の目標を教えてください。

具体的には、健康に留意して、長生きすることです(笑)。関わってきた子どもたちの夢の実現をずっと見守っていきたくなんです。そして、そこからパワーを得たもので、今日の前にいる生徒たちの夢の実現にむけてサポートしていきたい。今回、全国高校サッカー選手権熊本県大会のベスト4の監督は、全て僕の教え子なんです。準決勝でうちのチームに勝ったのは、平成6年のキャプテンですよ。うちが連覇できなかったことは悔しいですが、教え子の夢の実現をひとつ見届けられて嬉しく思いました。そして、改めて自分ももっとがんばろうと…。もちろん、チームとしては、全国高校サッカー選手権で優勝したいという強い気持ちがあります。高校のキャプテンとして優勝して、監督としても優勝したという人は今まで誰もいないそうなので、それにチャレンジし続けたいですね。



つくばキャンパスは、東西約1km、南北約4kmの自然に恵まれた広大なキャンパスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・研究組織がありますが、全てを知ることはなかなかできません。その組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。

体育センター

Sports and Physical Education Center

Introduce

筑波大学設置と同時に発足した体育センターは、共通科目としての「体育」や課外スポーツ活動における教育指導および施設管理を担っています。さまざまな競技の専門家を擁する本学ならではのノウハウと自信で、スポーツの魅力を伝え、レベルに関わらず各人の能力を引き出す、先駆的な体育指導に取り組んでいます。



小俣 幸嗣 センター長



筑波大学のプライド

“オリンピックメダリストとノーベル賞受賞者を輩出した大学”本学を紹介するときによく使われるフレーズです。この言葉の通り、本学はスポーツの分野でも、競技・指導の両面で大きな成果をあげています。その基盤を支えているのが体育センターです。

体育センターが管理する体育施設は、体育館、陸上競技場、グラウンド、プール、武道館、トレーニング場、合宿所など40以上に及びます。中でも、東日本大震災で大きな被害を受け、改築工事が行われていた総合体育館は、昨年9月18日に竣工式を行い、防災拠点としての機能やバリアフリーなどの設備も整った中央体育館として生まれ変わりました。これらの体育施設はいずれも学生や教職員に解放されており、授業や部活動などの利用で、常時、ほぼ100%稼働しています。また、一部は研究活動にも活用されています。

本学には体育専門学群があり、スポーツを専門とする学生や教員がいます。そのため、どの競技も正式な基準やルールに則って実施できるような高い水準の施設を維持していくことが不可欠です。このような体育施設の維持管理に十分なリソースを割くことができるのは、国立大学としては非常に稀で、本学ならではの大きな特徴といえます。一方で、特定の競技や部活動に限らず、共通科目としての体育にも同じ施設が使われますから、授業の内容もおのずと質の高いものになります。

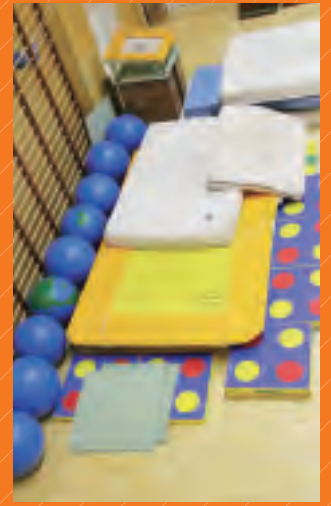
施設面での充実に加えて、競技種目ごとに専門の指導ができる教員がいることも重要なポイントです。通常、体育の授業を受け持つ教員は、一人でいろいろな競技を指導しなくてはなりませんが、本学では、競技者・指導者として日本や世界で活躍する教員を各競技に配しています。その数は、体育センターの専任教員26人を始め約100人にもおよび、どの競技についても、初心者から日本一を目指

す選手まで、それぞれのレベルに合わせた最適な指導ができるという自負があります。「普段の授業の中で、本物の競技、一流の演技を体感し、体育を専門としない一般の学生も、プロの指導を受けることができる。それが本学の体育教育の自慢です」(小俣幸嗣体育センター長)

スポーツへの扉を開く授業

教科としての体育が苦手・嫌いという学生もいます。体育センターでは、実技が上達するための指導はもちろんですが、実技がうまくできなくても、スポーツに親しみ、観戦者として楽しめるための知識が得られるよう、工夫を凝らした授業作りにも取り組んでいます。

中学や高校での体育には、カリキュラムや教える範囲に制限がありますが、大学ではそれがなく、自由に授業内容を組み立てることができます。そのため、難度の高い技を体験したり、テーピングの演習など、各競技の本質や魅力をいろいろ



な側面から紹介し、スポーツそのものへの興味や憧れを広げていきます。こういった授業も、専門性の高い施設や指導者がそろっているからこそ可能なのです。また、そういう環境で学んだ記憶は卒業後も長く残り、生涯に渡ってスポーツを身近なものに感じていくはずで

です。実際、体育の授業がきっかけとなって、進路が変わってしまう学生もいます。さすがに競技者になるのは難しいとしても、運動生理学などスポーツに関連した分野に興味を持ち、専攻を変える例は珍しくありません。体育教育から発展して、このような学際的な研究分野を深めることができるのも、本学の強みといえるでしょう。

新しいスタイルの 体育教育に向けて

昨今の健康志向の高まりや、2020年の東京オリンピック開催決定は、社会全体のスポーツ人気の追い風となっ

ています。しかしその流れとは裏腹に、開学時には4単位だった体育の授業数は、現在2~3単位と減少傾向。体育センターでは、各学群のカリキュラムや学生の就職活動の妨げにならない形で、共通科目としての体育の授業数を増やすための方策を探っています。

授業の時間割に組み込まれた体育では、毎週、固定された曜日・時間帯に決められた運動をすることになりますが、実際の日常生活において、そのようなことはほとんどありません。仕事の合間に時間を見つけて小刻みに、あるいは、休日にまとまった時間を取ってしっかりと、体を動かすというのが現実的です。また、体力やスキル・経験も人によってさまざまですから、運動が苦手な人でも楽しめる参加方法、もっと頑張

りたい人にはレベルアップした指導など、多様なニーズに応える場も必要とされています。「それにならって体育の授業も、例えば夕方や放課後、土日に集中した授業日程を設定したり、ラジオ体操のような簡単な運動を長期間続けるなど、実態を伴い、学生が取り組みやすい開講形態を工夫し、提案できるのではないかと検討しています。そうやって、40年の間に減ってしまった授業時間を、次の40年をかけて少しずつ取り戻していきたい」と小俣センター長は語っています。



附属学校の 名物先生登場！ 12

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。



今回の先生

筑波大学附属久里浜特別支援学校

つね つぐ りつ え
恒次 律枝 看護師

Profile

神奈川県立こども医療センター勤務を経て、現在附属久里浜特別支援学校に勤務。勤務後、武蔵野美術大学短期大学部美術科を卒業し、今年度新設された図書室「おひさま文庫」の壁面装飾を手がける

保健室はいつの時代も学校のオアシス、ほっとできる場所だ。ここでも、授業の合間には子どもや先生がしきりに出入りする。3年ほど前に、壁をピンク色に塗り替え、本やおもちゃなども置いて、明るく親しみやすい保健室にリニューアルした。以来、それまでなんとなく遠慮がちに保健室を利用していた先生たちも積極的に子どもを連れてくるようになった。遊びたい、と来る子どももいる。

久里浜特別支援学校は自閉症児を対象とした教育を行っている。恒次さんは、普段の授業に直接関わることはないが、幼稚部と小学部、併せて49人の子どもたち全員に注意を払う。自閉症という、おとなしくて神経質なイメージを持つかもしれない。しかし教室から聞こえる子どもたちの声はとて賑やかだ。人数が少ないことを除けば、ごくありふれた学校の風景とほとんど変わらない。ただ、自閉症の子ども

の中には、ケガをしても痛いと言わなかったり、具合が悪くてもそのことをうまく伝えられない者がいる。体調の変化を見逃さず、子どもの気持ちを引き出しながら適切に手当てができるのは、担任の先生とベテラン看護師の連携プレーがあってこそだ。

恒次さんは、看護師になってからずっと小児医療や特別支援教育に関わってきた。この学校に赴任する前は、神奈川県立こども医療センターの肢体不自由児施設で、併設された養護学校の先生と協力しながら子どもに接してきたし、教員だった祖父母から、授業研究会などの話をよく聞いていた。「学校の看護師」は、なるべくしてなった職業だと言えそうだ。しかしながら特別支援学校でも、専任の看護師が配置されていることは稀。数年単位で異動してしまう先生たちとは違って、10年以上もこの学校の保健室を守り続けている恒次さんの存在は、学校全





体にとっての大きな安心感でもある。

ひとことに自閉症と言っても症状や程度はさまざま。ちょっとしたケガの手当てをするにも、絆創膏を嫌がる子どももいれば、体に触れられることすら拒否する子どももいる。それぞれの子どもの特徴を把握し、処置の方法を自分で選ばせたり、ぬいぐるみを使って気持ちを落ち着かせるなど、看護師としての知識やスキルだけにとどまらない、いろいろな工夫やひと手間が必要だ。本やおもちゃもそのための道具。身長計にもキリン柄のカバーがかけられ、無機質な器具には見えないようになっている。もともとこの保健室づくりは、病院に行くことが苦手な子どもに、少しでも病院の雰囲気に慣れてもらおうということからスタートした。確かによく見ると、病院の待合室を思わせる長椅子が置かれていたり、聴診器などの

器具に自由に触れられるようになっていいる。子どもたちの不安を取り除くためのアイデアがいっぱいだ。

寄宿生活を送る子どもたちの健康管理も大切な仕事。現在、5歳から12歳までの6人が寄宿舎で暮らしている。寄宿舎は校舎とつながっていて、入るとまず高い天井と山小屋風の広い空間に驚く。居間・遊び場・食堂・学習スペースなどが配置され、さらに奥には大部屋の寝室がある。寝室は、カーテンなどで仕切って個室のようにすることもできる。居心地の良い雰囲気の中で、入舎当初は寂しがっていた子どももじきに慣れて、年齢に関係なく、ともに学び遊ぶようになる。午後、授業が終わって子どもたちが帰ってくるころになると、恒次さんは寄宿舎へ行って検温と体調のチェックをする。体温計を嫌がったり、遊びに夢中になっている子ども一人一人に、優しく話しかけたり一緒に遊んだりしながら、さりげなく体温計を脇に挟み、異常がないか気を配る。子どもを預ける保護者にとっても頼れる看護師さんだ。

この仕事のいちばんの喜びは、子どもたちが小さなハードルを乗り越える瞬間に立ち会えること。一人で手を洗うことができるようになる、苦手な薬が飲めるようになる、体調の変化を話せるようになるなど、些細なことだが本人たちにとっては大きな成長だ。自閉症児は人との関わり方が下手だと言われるが、関わりたくないわけではない。その子に合った方法が見つければ、コミュニケーションは広がっていく。けれどもそれは障害があってもなくても同じこと。いつでも安心して行くことのできる場所は誰にも必要だ。一人一人の子どもと丁寧に向き合う恒次さんのまなざしは、看護師という役割を越えた愛情に満ちている。

今日も子どもたちが保健室へやってくる。



雷坂 浩之 副校長

恒次看護師は、医療センターや一般病院にて10年程勤務した後、本校に赴任しました。本校でも13年ほど勤務している大ベテランの看護師です。本校が国立久里浜養護学校の時代には、さまざまな障害を合わせ持つ重度重複の子どもたちの医療的ケアに熱心に取り組まれ、現在は知的障害を合わせ持つ自閉症の子どもたちの健康管理を中心とした業務に携わっています。知的障害を対象とする特別支援学校に常勤の看護師

を配置している例がほとんどありませんので、恒次看護師の存在自体が全国的に知的特別支援学校の垂涎的になっています。「フラメンコ」という意外な趣味の持ち主で、白衣を着ながら踊ったりすることで、まずは保健室に親しんでもらい、病院やお医者さん嫌いの子どものために安心感を与えたいなんて考えているようです。これからも本校の幼児・児童の健康面を支える重要な存在であり続けてほしいと思っています。

世界選手権でメダルラッシュ!

第10回世界ラート選手権大会2013(アメリカ・シカゴ)で、高橋晴彦選手(2013年卒)が、男子個人総合で日本人初の「金」、種目別・跳躍「金」、斜転「銅」、田村元延選手(人間総合科学研究科 コーチング学専攻 3年制博士1年)が男子個人総合で「銀」、斜転で「金」、堀口文選手(同 体育学専攻 博士前期1年)が直転で「銅」を獲得。上記3人と他1人で臨んだ団体戦も「銀」メダルに輝いた。

日本代表を率いた総監督は、体操部の本谷聡顧問。1995年の第1回全日本ラート競技選手権から関わり、第2回から7連覇を成し遂げた日本ラート界の先駆者だ。「世界選手権の個人総合は、ラート発祥の地・ドイツの選手が優勝してきたが、今回は、本学体操部OBと学生が金・銀。歴史的快挙を成し遂げた。さすがにここまでやってくれるとは思っていなかった」と顔をほころばせた。

ラートは、直径約2.2mの鉄の輪を2本平行につないだ器具を使う運動で、本学体操部部長の長谷川聖修教授(体育系)が、1989年にドイツから持ち帰ったもの。現在の競技人口は、全国で500人ほどだ。

ドイツには、小さい頃からラートに親しむ環境があり、会員1000人以上のクラブチームもあることを考えると、ドイツの選手を抑えて優勝するということがどれほどの快挙なのかは、想像に難くない。

ラート競技には、輪を2本とも接地させて回転させる「直転」、一方の輪を浮かせて回転する「斜転」、転がしたラートを飛び越える「跳躍」の3種目がある。世界選手権は、全日本選手権と違って音楽に合わせて演技をするため、日本代表に選ばれた選手は、音楽選びからそれに合わせた演技構成、衣装まで、自力で準備する。

「0.05ポイント差で金か銅かという世界なので、曲も動きも衣装も全てにこだわった。自分だけで考えるのはとても大変だが、体育専門学群の新体操経験者に構成や演技の相談をしたり、芸術専門学群の友達に衣装をデザインしてもらったり、いろんな人の力を借りることができた。あらためて筑波大はすごいと思った」と堀口選手。世界選手権本番で実際に演技をするまで、どう評価されるか見当もつかなかったが、高く評価

され、自分の感性を信じてやればいいという自信がついたという。一方で、技の安定性など、ドイツ人選手にあって、自分にはないものも見た。自信を胸に、見つけた課題に取り組んで、2年後に開催される世界選手権での直転「金」、総合でのメダル獲得を狙う。

世界選手権初出場(2007年)で、日本人初の種目優勝(跳躍)、3度目(2011年)には日本人初の総合銅メダル獲得など、日本のラート界を世界水準に引き上げてきた田村選手は、「今回で4度目の世界選手権。今までで一番自分の力を出し切れて満足」と、競技生活に一区切りつけたようだ。今後は、論文作成や指導などに取り組みながら、できる範囲で競技活動を続ける。

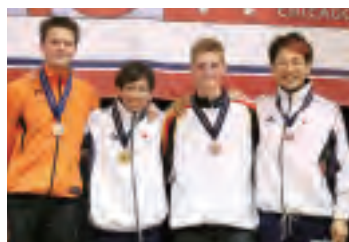
ラートは、大学から始めても世界選手権のメダルを狙える競技だ。田村選手、堀口選手は大学1年から、高橋選手は大学2年から始めた。田村選手は体操、堀口選手はバトミントン、高橋選手は野球経験者だが、過去には、運動経験のない生物資源学類生が世界選手権出場を果たした例もある。





「大学から世界が狙いたければ、ぜひ体操部へ。一方で、他人と競うのではなく、楽しく体を動かしたいという部員も歓迎している。体操部の目的は、自分と仲間の体と向き合い、体操そのものを楽しむこと。部の練習時には、ラートやGボール、縄など、さまざまな手具・器具・道具を使っの体作りや、パフォーマンスをしている。競技中心の部員、パフォーマンス中心の部員…そのウエイトは人それぞれ」と本谷監督。

雙峰祭などでそのパフォーマンスをご覧になった方も多いことだろう。「つくば体操フェスティバル」を開催するなど、体操部は、ラートに限らず、常に創造的、先進的な体操に取り組み、その普及に力を注いでいる。



「斜転」金メダルの田村選手(右から3番目)と銅メダルの高橋選手(右端)



「直転」銅メダルの堀口選手(右端)



田村選手を祝福する本谷監督

Information

前身の師範学校から140年を越える歴史を有し、オリンピックの金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】 <http://www.sports.tsukuba.ac.jp/>
【筑波大学体育会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

体操部

■ 第19回全日本ラート競技選手権大会

- 【男子総合】準優勝 田村元延(院後期1年)
- 【男子跳躍】準優勝 田村元延
- 【男子直転】準優勝 田村元延
- 【女子総合】優勝 松浦佑希(体育3年) 準優勝 堀口文(院1年)
- 【女子跳躍】優勝 堀口文 準優勝 松浦佑希
- 【女子直転】優勝 堀口文 第3位 松浦佑希
- 【女子斜転】準優勝 松浦佑希

硬式野球部

■ 2013年度首都大学野球新人戦 優勝

- 【大会MVP】大澤永貴(体育1年)

柔道部

■ 柔道グランドスラム・東京

- 【男子81^{kg}級】優勝 永瀬貴規(体育2年)

■ 平成25年度講道館杯全日本体重別選手権大会

- 【男子81^{kg}級】優勝 永瀬貴規(体育2年)
- 【女子48^{kg}級】準優勝 遠藤宏美(体育3年)

■ 平成25年度全日本学生柔道体重別団体優勝大会

- 男子団体 優勝(3年ぶり3回目)

剣道部

■ 第61回全日本学生剣道優勝大会 男子団体 優勝(2年ぶり11回目)

弓道部

■ 第45回関東学生弓道選手権大会決勝大会 男子 準優勝 女子 準優勝

オリエンテーリング部

■ 第2回全日本ミドルオリエンテーリング大会

- 優勝 宮田優花(人間学群心理学類2年)

2014年度日本学生オリエンテーリング選手権大会(ミドルディスタンス、リレー)
3/8～9 栃木県矢板市

陸上競技部

■ 第97回日本陸上競技選手権リレー競技大会

- 【女子4×100mリレー】準優勝
- 中野瞳(院1年)・相馬絵里子(体育4年)・世古和(体育4年)・清山ちさと(体育4年)

第49回千葉国際クロスカントリー大会 2/9 昭和の森公園(千葉市)

第27回福岡国際クロスカントリー大会 2/22 国営海の中道海浜公園(福岡市)

第17回日本学生ハーフマラソン選手権大会 3/2 東京都立川市

ハンドボール部

■ 2013年秋季リーグ戦

- 男子3位 【優秀選手賞】山手就策(体育4年) 【特別賞】八巻雄一(体育4年)
- 女子3位 【優秀選手賞】大谷佳奈美(体育4年) 【特別賞】安倍千夏(体育4年)

ダンス部

第51回筑波大学ダンス部公演 3/6 シアター 1010

テニス部

第4回筑波大学国際テニストーナメント 3/29～4/5 本学他

継続的な活動がつながりを育む



207人の会員が4系統8グループに分かれ、別々の施設で活動している「社会福祉研究会」(浜田博文顧問)。施設ごとに活動はさまざまだが、一つだけ共通したルールがある。「活動のポイントは、定期的、継続的に活動することです。グループによって頻度は違うものの、週に1回か2週に1回の活動を継続してきた結果が、38年間の継続を可能にできました」と、去年の10月まで会長を務めた浅海貴大さん(人間学群教育学類3年)。今年度40周年を迎えた筑波大学で、開学初期からサークル活動は続いている。

4系統8グループの活動

活動は、児童養護系、知的障害者福祉系、高齢者福祉系、学校ボランティア系の4つの系統に分けられる。

児童養護系には、愛児園、窓愛園、道心園東ホーム、道心園西ホームという4つのグループがある。これらの児童保護施設には、何らかの事情で親と一緒に暮らせない幼児から高校生までの子どもたちが集団生活を送っている。子どもたちは高校に進学できなければ退所しなければならないため、受

験生の学習指導には特に力が入るが、学生は他にも運動会やクリスマス会などのイベントに参加し、お兄さん、お姉さんとして子どもに寄り添う役割もある。



学習について意見交換を行う窓愛園グループの勉強会

Information

筑波大学には、約40の文化系サークルが所属する「文化系サークル連合会(文サ連)」と、約30の芸術系サークルが所属する「芸術系サークル連合会(芸サ連)」という、大学公認の学生組織があります。このコーナーでは、こうした文化系・芸術系サークルによる公演や、学園祭などのイベント情報、各種表彰・コンテスト結果などをお知らせします。(詳細は下記ホームページをご参照ください)

【文化系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

【芸術系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

週に1回3時間弱の活動で、接する時間という意味では親や施設の先生方におよばないが、子どもたちは年齢が近い分、学生に悩みを相談することも多い。「やむなく活動を休む時は、教材を代わりのメンバーに渡してもらい、他の曜日に行くなど、活動を続けるのは大変だが、子どもの心の支えになっていると信じて活動している。子どもの成長が直に見られるのがうれしい」と浅海さんは話す。

知的障害者福祉系では、尚恵学園、みもり園という知的障害者更生施設で、学生が企画した劇や運動などのレクリエーション活動を行っている。施設の利用者は、基本的な生活に困らない方から、つきっきりで職員の補助がなければ生活できない方まで、障害の重さはさまざま。「中には、こちらの話していることが理解できない方も、声が言葉にならない方も居るため、知識、経験がないうちは、それに戸惑うかもしれない。でも、活動を続けていくと、手をひっぱったり、言葉にならない声を発したりするのが、何かの表現なんだということが分かってくる。そうすると、一緒に過ごすのが楽しくなる。利用者さんも学生が来るのを本当に楽しみにしてしてくれる」と田中大輔さん(人間学群心理学類3年)。



尚恵学園でのレクリエーション



新つくばホームの様子



新つくばホームで利用者さんの髪を乾かす様子

高齢者福祉系は、新つくばホームという老人ホームで、車いすを押したり、入浴介助をしたりして、デイケアの手伝いをしている。「元気な方ばかりでなく、寝たきりの方、痴呆の方、耳が遠い方、口がうまく動かない方もいて、意思疎通が大変だが、若者からは得られない知識が得られる。毎回楽しみにして行っている」と横幕達也さん(芸術専門学群3年)は言う。新リーダーの山崎志帆さん(芸術専門学群2年)はこれからの活動について、「筑波大学の他のサークルと連携して、パフォーマンス

などの催しを実施し、老人ホームで体験できないことを体験してもらいたい」と張り切っている。

学校ボランティアグループは、土浦市とつくば市の中学校で、総合的な学習の時間の支援、先生のお手伝い、放課後に希望者へ学習サポートをしている。「学校現場を生で見るできるので、教員志望の学生にとっていい経験になる」と筒井翔太郎さん(人間学群教育学類3年)。

社会福祉研究会内でのつながり

人間学群所属の学生が一番多いが、社会学類や看護学類などの他学類の学生も増えている。活動後にご飯を食べに行ったり、遊びに行ったりするほか、社福全体として合同新歓、ボーリング大会、クリスマスコンパ、二月追い出しコンパ、各ミーティング後の懇親会などがあり、さまざまな人と関わりあえるのも魅力だ。

「ボランティアに対する意識がもともと高くして社会福祉研究会に入るという人もいるが、なんとなく先輩に誘われたり、ちょっとした興味で始めたりする人も多いと思う」と現会長の小牧叡司さん(人間学群教育学類2年)。「継続的に行けるのが社会福祉研究会の良さで、活動を続けていくうちに、個々人の中に活動に対する信念、思い、福祉観が生まれてくる。これから各々の福祉観を話し合える場を作り、刺激し合い、それぞれの活動につなげていきたい」と熱く語った。

劇団竹蜻蛉

第172回冬公演「感情CANDY」

1/25 19:00～ 1/26 13:00～/17:00～(全3回)
(場所/第1エリアE棟401教室)

津軽三味線倶楽部 無絃塾

第16回卒業公演(創立20周年記念公演)

1/26(場所/ノバホール)
午前の部 10:30開演 午後の部 16:30開演
一般3000円、学生1500円

ブロックプレーテ同好会

定期演奏会

1/25(場所/アルスホール) 13:30 開演

管弦楽団

プロムナードコンサート

1/22(場所/ノバホール) 19:00開演
全席自由・入場無料

ギター・マンドリン部

第35回定期演奏会

2/11(場所/つくばカピオ イベントホール)
13:00開演

ふるさとつくばゆいまつり実行委員会

第3回ふるさとつくばゆいまつり

3/8 10:00～17:00(荒天順延)
(場所/つくばセンター広場)



アボキムの滝



ズマロック



ラゴス

日本人とよく似ているヨルバ族

国内には、300以上の民族がいて、言語も500以上あり、公共機関や学校では、英語が使われています。ハウサ族、ヨルバ族、イボ族が3大民族です。私はヨルバ族。ヨルバ族は、お互いを敬い、礼儀正しいところが、日本人によく似ていると思います。目上の人に対しては、家族でも敬語を使います。毎朝、両親に、床に手をうついて挨拶したりするんですよ。外で目上の人に会うと、日本人とよく似たお辞儀もします。

人への接し方が似ているので、日本に来てすぐに馴染めました。違うのは、日本人は、年上の人からも年下の人に声を掛けて挨拶したりするところで、素晴らしいことだと思います。同じナイジェリア人でも、民族によって、習慣や気性は全く違い、フレンドリーに接する民族もいます。

富士山のようなシンボル、ズマロック

お薦めの観光地は、スレジャのズマロック。日本の富士山のような国のシンボルで、紙幣にも描かれています。平らなところに突然大きな岩がある、とても不思議な風景です。

また、東京都より広いヤンカリ国立公園は、ナイジェリア最大の野生動物公園で、サファリや温泉が楽しめます。他に、アボキムの滝など、美しい滝もたくさんあります。

ナイジェリアの伝統的な料理には、ジヨロラライスやフライドライス、エグシスープなどのさまざまなスープや、スープと一緒に食べるアマラなどがあります。

ジヨロラは、野菜やチリペッパーなどの香辛料が入った、辛口のトマトベースの炊き込みご飯。とても辛口ですが、辛さは調節できるので、辛いのが苦手な人でも大丈夫です。写真のジヨロラライスに添えられているのは、ナマズです。ナマズは、ナイジェリアで人気の食材で、養殖されています。フライドライスは、甘味の特徴の炊き込みご飯で、調理用のバナナ(プランテーション)や、野菜や鶏肉、牛肉などが入っています。エグシスープは、ウリ科のエグシの種を砕いたものがベースのスープで、独特の色と風味があり、ヤム芋を乾燥させた粉をお湯で練ったアマラと食べます。主食は米とヤム芋の他に、キャッサバ芋もよく食べます。

映画の年間製作本数世界2位

日本でも、時々、ナイジェリアンアートの展覧会が開催されていますが、テラコッタの像で知られるノック文化は、アフリカで最も古く、紀元前から栄えました。10〜15世紀には、イフェ文化(写真下)、続いてベニン文化が栄えました。ピカソやマチスなど多くの芸術家に影響を与えたといわれるベニンアートは、青銅やシンチュウの彫刻です。

文学では、ノーベル賞作家のウォレ・ショインカやチヌア・アチズベなど、世界的に有名な作家がいます。また、映画産業もさかんで、製作される映画の本数は年間800本ほど。インドに続く世界2位です。

このように、文化や芸術でも、アフリカをリードしているナイジェリアですが、日本人には、「サッカーの国」というイメージが強いようですね。ワールドカップには過去4回出場、2014年ブラジル大会の出場も決定しました。「スーパーイーグル」と呼ばれるナショナルチームを、日本と一緒にぜひ応援してください。



アフリカネイションズカップ2013 優勝



イフェ文化



蒸したヤム芋とトマトと魚のソース



ジヨロラライス



プランテーション



アマラとエグシスープ



Homeland

本学には、80を超える国から、約2千人の留学生が訪れています。
このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、
食べ物など、多岐にわたって紹介させていただきます。



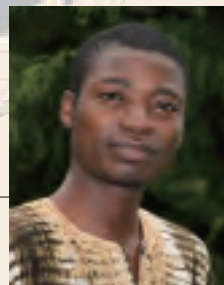
ナイジェリア連邦共和国



アデラブ オルワフェミ サミュエル

Adelabu Oluwafemi Samuel さん

所属: 人間総合科学科学研究科 感性認知脳科学専攻
趣味: 音楽鑑賞・ドラム演奏・旅行・写真



ジャイアント・オブ・アフリカ

ナイジェリアは、アフリカ大陸において最も人口が多く、有名な国家。ジャイアント・オブ・アフリカとして知られています。日本の2.4倍ほどの面積に、1億5000万を超える人々が暮らしています。最大の都市ラゴスは、世界有数のメガシティです。

とても暑い地域もありますが、私が育った南西部のイバダンは比較的過ごしやすい気候で、一番暑い時でも、日本の夏と同じくらい。じめじめした感じもよく似ています。季節は、3月〜9月までの雨季と、10月〜2月の乾季に分けられ、一番寒い12月は、セーターで過ごすくらいの気温です。

私は高校までイバダンで過ごし、アクレにあるアクレ連邦技術大学を主席で卒業した後、グラデュエイト／リサーチアシスタントをしながら、大学院で修士を取りました。筑波大学には2年半ほど前に来て、あと1年半ほど勉強したら、ナイジェリアに帰って大学教員になりたいと考えています。

アクレ連邦技術大学は5年制です。ナイジェリアでは先月まで、公立大学の教員組合が、教育環境の改善を求めてストライキをし、半年ほど大学が閉鎖されていました。私の学生時代にも、大学教員の大規模なストライキが2回あったために在学期間が延び、卒業までに6年かかりました。

ストライキは困りますが、アクレ連邦技術大学は広大な敷地を持っていて、観光名所になるくらい美しいですよ。筑波大学よりずっと広いです。



ヨルバ族



ドーバ祭り



アクレ連邦技術大学



筑波大学OBの 研究者グループが イグ・ノーベル賞を受賞!



イグ・ノーベル賞を受賞した筑波大OBトリオ(左から柘植信昭さん、今井真介さん、朝武宗明さん)

本学の卒業生で、いずれもハウス食品株式会社に勤める今井真介さん、柘植信昭さん、朝武宗明さんらの研究グループが、2013年のイグ・ノーベル賞化学賞を受賞しました。受賞理由は、「タマネギが人に涙を流させることは、従来、科学者が考えていたよりも、もっと複雑な生化学作用が関わっていたことを発見したことについて」です。

ユーモアたっぷりの授賞式

その知らせは一通のメールでした。「授賞式まで誰にも言わないで」との厳しい条件付き。話したい気持ちを必死にこらえ、「市場調査」の名目でひっそりと、授賞式が行われる米国ボストンのハーバード大学サンダースシアターへと向かいました。

9月12日に行われた授賞式は、「本物の」ノーベル賞受賞者も列席し、1200人の定員が満席になる人気イベントです。開会前から観客が作った無数の紙飛行機が場内を舞っており、床に散らばった紙飛行機を、ノーベル賞学者ロイ・グラウパーがモップで掃除しています。そんな中を受賞者たちは、電車ごっこのよう

に1本のロープに牽かれてステージに上がります。受賞スピーチはそれぞれ1分。観客を笑わせることが求められます。時間をオーバーすると8歳の女の子が登場して「もうやめて」と強制終了です。

スピーチの合間にはオペラが上演されます。今年のテーマ「Force(力)」に沿ったオリジナル作品で、遠心力を利用して出産するというアメリカの特許技術を題材にしたもの。サイエンスショーなども交えて、2時間ほどの表彰式は大盛り上がりでした。

緑色の正体を追って

研究の発端となったのはレトルトカレーの開発。ニンニクとタマネギを炒めると、鉛色になるはずが緑色になるトラブルが発生したため、その原因を調査することにしました。調べていくと、緑色の生成反応にはニンニクやタマネギに元々含まれている4つの成分が関与していることがわかり、色素の生成機構も解明できました。この4成分のうち



の2つが「PRENCISO」というタマネギ中の主要硫黄化合物と「アリナーゼ」という酵素です。

PRENCISOをアリナーゼで分解すると、不安定な中間体ができ、この中間体から催涙成分とタマネギの香りとなる風味成分の両方が作られると、従来からいわれてきました。確かに、タマネギから抽出した精製度の低いアリナーゼでPRENCISOを分解すると、催涙成分と風味成分の両方が発生します。ところが、変色の研究をしている中で、このアリナーゼをよく精製して同じ実験をすると、催涙成分は発生せず、風味成分だけが発生することに気づきました。それでタマネギには、PRENCISOから催涙成分を作るために不可欠な、アリナーゼとは異なる未知の酵素が存在するはずだと考えたのです。

催涙成分は、PRENCISOをアリナーゼで分解すると生じる不安定な中間体から、自発的に生成するというのが定説でした。これを覆し、不安定な中間体から催涙成分が作られるために

は、新しい酵素が必要であることを発見し証明したことが、イグ・ノーベル賞受賞となった研究成果です。この新しい酵素の働きをコントロールできれば、切っても涙が出ないだけでなく、より風味の増したタマネギを作ることが可能です。タマネギの催涙成分に関する研究は、その専門の世界ではすでに完結したものとして扱われていたため、この論文が発表されたとき、研究者から驚きの声が上がりました。

「筑波魂」でしつこくチャレンジ

今井さんたちはタマネギや酵素の専門家ではありませんでしたから、この成果に到達するまでには大変な苦労がありました。酵素の精製や活性分析、タンパク質の遺伝子解析など、専門知識のある人にとっては簡単なことでも、基礎から勉強し、大学の講座に通い専門家のアドバイスを受けながらの研究活動。不安定な酵素が分解してしまわないように1日中冷蔵庫の中で実験をしたり、しらみつぶしに文献を調べて利用でき

そうな実験を試してみるなど、まさに試行錯誤の連続でした。緑色に変化するタマネギと遭遇してから新しい酵素の発見までに7～8年の歳月がかかりました。その間、会社から研究の打ち切りを告げられそうになったことも。けれども、専門家でなかったからこそ、当たり前の中にある疑問に気付くことができたのだと、振り返ります。しぶとく研究を続けた結果、催涙成分が発生するメカニズムや、それを抑えたときにできる成分やその機能についての膨大なノウハウが蓄積され、新商品の開発にもつながっています。

3人はそれぞれ筑波大学第二学群農林学類の出身ですが、全く違う専攻で卒業年も異なります。たまたま同じ会社で一緒に研究チームになり、そこで発揮されたのが「筑波魂」。失敗しても諦めずに続ける、そのしつこさとやる気が筑波魂だと彼らは言います。筑波魂の詰まった、涙の出ないタマネギが店頭に並ぶのも、そう遠くないかもしれません。

Ig Nobel Prize

1991年に創立されたイグ・ノーベル賞は、「人々を笑わせ、そして考えさせてくれる研究」に対して与えられるもので、ノーベル賞のパロディとして知られていますが、受賞研究はいずれも学術的価値の高いものです。今回、今井さんたちが受賞した研究は、タマネギを切ると涙が出る原因物質ができる化学反応のしくみを解明したもので、2002年に「Nature」誌に発表されました。



イグ・ノーベル賞の賞状

「本物の」ノーベル賞受賞者4名の直筆サイン入り

賞金の「10兆ジンバペドル」

賞金なしが通例だが、本年は10兆ドルジンバペドルが贈られた。日本円にすると約400円(2009年4月に発行停止)



授賞式のスピーチでタマネギを掲げる今井さん



賞品の「非常用ハンマー」

今年のテーマ「Force」にちなんだ記念の盾。「緊急時にはこのハンマーでガラスを割って下さい」と書いてあるが、このハンマーの上にはガラス板が張られている。「ハーバード大学の“空気”入り紙パック」など、例年賞品もユニーク

TOPICS



開学40+101周年記念式典

筑波大学開学40+101周年を祝う

10月1日に開学40周年(創基141年)を迎えた筑波大学は、同日、筑波大学大学会館講堂において記念式典を挙行了しました。

永田恭介学長は式辞で、『開かれた大学』、また『不断の改革に挑む大学』という建学の理念に思いを馳せ、ヒトと地球の豊かな未来の創造に貢献する決心を新たにし、『IMAGINE THE FUTURE.』のメッセージのもと、『未来構想大学』として本学一丸となって、教育研究の革新を目指します』と述べました。

永田学長の式辞に続き、来賓の下村博文文部科学大臣(布村幸彦高等教育局長代読)、松本紘国立大学協会会長(京都大学総長)、橋本昌茨城県知事、岩崎洋一元筑波大学長から祝辞を賜りました。

式典には、国会議員、国立大学長、筑波研究学園都市内の関係者、名誉教授、OBおよび教職員ら約750人が出席し、筑波大学の成長を祝いました。式典終了後、つくば市内のホテルに会場を移し、祝賀会を開催しました。



式辞を述べる永田恭介学長



開学40+101周年記念祝賀会

フランス共和国グルノーブル大学学長が永田学長を表敬訪問・大学間交流協定を締結

11月11日、フランス共和国グルノーブル大学ベルトラン・ジラル学長が永田恭介学長を表敬訪問されました。本学とグルノーブル大学はこれまでの交流実績に基づき大学間交流協定を締結することとなり、ベルトラン・ジラル学長が協定書調印式出席のため訪日されました。

表敬訪問ではベルトラン・ジラル学

長より、グルノーブル大学を構成する6大学(ヨセフ・フーリエ大学、ピエール・マンデス・フランス大学、スタンダール大学、グルノーブル工科大学、グルノーブル政治学院、サヴォア大学)と本学との交流が、今回の大学間交流協定の締結により促進されることを期待するとの発言がありました。永田学長はフランスでも有数



表敬集合写真

の総合大学である同大学との協定締結を歓迎すると述べました。

いわき市でまちづくり復興シンポジウムを開催

12月22日、福島県いわき市にて「いわき市復興まちづくりシンポジウム～若い世代とともに未来への基盤を築く～」を開催しました。

本シンポジウムは、いわき市の高校生を対象に「地域のまちづくりに参画してもらう」ことをコンセプトにしており、本年5月の大学での模擬講義、7月のつくば市のまちづくり事例見学、8月・10月のいわき

市および磐城桜が丘高校でのワークショップ、11月の本学学園祭におけるシンポジウムを経て、これまでの取り組みの集大成となるものです。

当日は、磐城高校より「高校生によるハザードマップ」、磐城桜が丘高校より「高校生の発想によるいわきまちづくりプラン」と題した発表がありました。生徒は、年齢

の近い学生・大学院生のサポートを受け、科学的手法や他地域でのまちづくり事例を学び、発表に臨みました。





わたしが描いた花火が夜空に咲いた！ 小児患者に夢と希望を与える「ゆめ花火」

もし、自分の描いた花火が本物の花火になって、見上げる夜空に咲いたとしたら、一生忘れない美しい思い出になるでしょう。

小児患者に、こんな素敵な夢を届ける活動をしているのが、医学系学生団体「つくばけやきっず」です。

「一時でも病気の苦しさを忘れるような楽しさを味わい、たくさんのサポーターがいることを実感することで、附属病院で長い闘病生活を送っている子どもたちに夢と希望を持ってもらいたい」と、入院中の子どもたちが描いた「夢の花火」を、実際の花火にして、学園祭で打ち上げています。

この活動は、3年前、当時応用理工学類3年だった穂戸田勇一さんが、「幼い頃、入院した病院の窓から見た花火に勇気づけられた」という経験から発案したもので、今回で3回目の開催となりました。

11月4日の開催当日は、附属病院内に集合し、ワークショップで、キラボン※を制作した後、楽しく装飾したバスで、花火観



賞会場(3K棟3階会議室)まで移動。会場では、五十嵐徹也附属病院長の挨拶に続き、プロジェクターを使って、子どもたちが描いた「ゆめ花火」の絵をストーリー形式で紹介しました。

気分が盛りあがったところでいよいよ花火。花火がひとつ打ち上げられる度に、子どもたちの歓声があがり、4号玉(直径12センチ)53発の「ゆめ花火」がみごとに夜空を彩りました。

参加者は年々増加し、本年度は11カ月の赤ちゃんから12歳までの子どもたちと保護者13組43人。全行程に、五十嵐附属病院長や「ゆめ花火」顧問の小児科医 福島敬准教授ら医師3人、看護師4人、保育士3人が同行し、万全の態勢で臨みました。

病気の子どもたちを預かる企画であるため、医療スタッフの支援なしには成り立ちません。開催には、他にも、本学学生団体の「花火研究会」、「アスバラガス」※、ジャグリングサークル「Sheep」や民間企業の協力、大学からの資金援助など、「ゆめ花火」に賛同するさまざまな団体からの支援を受けています。

「つくばけやきっず」のメンバーは11人。医学類生が多く、看護学類、医療科学類の学生とフロンティア医科学専攻の大学院生がいます。

「メンバーが増え、ノウハウも蓄積できてきたので、今回は計画通りに進みました。前回よりうまくいって、楽しかったです」と満足そうな加藤愛香里代表(医学類5年)。「今後は、病院から外出できない子どもたちのために、『ゆめ花火』をネット中継することや、他の企画にも挑戦したい。医師になったら、治療が第一になり、こうした活動を今のようにやることはできないでしょう。病棟で自由に動ける医学生生の立場を利用してできることを、どんどんやっていきたいと思います」と、今後の活動への熱い胸の内を語ってくれました。

活動についてより詳しく知りたい方は「つくばけやきっず」のブログやFacebookを参照してください。

<http://yumehanabi.tsukuba.ch/>

※キラボン：附属病院で活動をしている芸術系ボランティア団体「アスバラガス」の協力により、この日のために開発した、腕に装着できる光るおもちゃ。キットになっていて、子どもたちが、色を選んだり、絵を描いたりして完成させる。



キラボンの制作風景

受賞 Awards and Prizes

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
第24回つくば賞	林純一教授(生命環境系)	_____
2013年度 International Eco-Science Conference 学会賞	安梅勅江教授(医学医療系)	_____
情報処理学会山下記念研究賞	和氣愛仁准教授(人文社会系) 永井正勝助教(人文社会系)	_____
2013年度日本薬学会 環境・衛生部会 学術賞	熊谷嘉人教授(医学医療系)	_____
第21回生物工学論文賞	青柳秀紀教授(生命環境系)	_____
水文・水資源学会 学術賞	恩田裕一教授(生命環境系)	_____
日本アルコール・薬物医学会 第19回学会優秀論文賞	森田展彰准教授(医学医療系)	_____
第5回独創研究内山記念賞	坂入洋右教授(体育系)	_____
日本学術振興会 科学研究費補助金第1段審査表彰	渡邊真一郎教授(システム情報系) 亀山幸義教授(システム情報系) 青嶋誠教授(数理物質系)	_____
第11回角川財団学芸賞	斎藤環教授(医学医療系)	_____
2013年度全国大学農場技術賞	松本安広技術専門官(農林技術センター技術室)	_____
Complex Adaptive Systems 2013 Best Theoretical Paper Award	イリチュ(佐藤)美佳教授(システム情報系)	_____
三井住友海上福祉財団賞	徳田克己教授(医学医療系) 水野智美准教授(医学医療系)	_____
2013年度 医学教育等関係業務功労者 文部科学大臣表彰	櫻井秀子技術専門官(医学系技術室) 小久保隆夫調理師(病院総務部)	_____
2013 IEEE MTT-S Japan Young Engineer Award	王小龍研究員(プラズマ研究センター)	_____
プラズマ・核融合学会第30回年会 若手学会発表賞	池添竜也助教(数理物質系 プラズマ研究センター)	_____
日本障害理解学会賞	水野智美准教授(医学医療系)	_____
Novel method for isolation polyphenols from olive mill water" Best Poster Prize, チュニジア-日本 文化・科学・技術学術会	中嶋光敏教授(生命環境系/北アフリカ研究センター センター長) Marcos Antonio Das Neves 助教(生命環境系 北アフリカ研究センター) Dammak Ilyes (生命環境科学研究科 国際地線技術開発科学専攻 博士後期2年)	_____
第7回 つくばナノテク拠点シンポジウム ポスター賞	川島裕嗣 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士後期2年)	後藤博正准教授(数理物質系)
APAC Silicide 2013 "Young Scientist Award"	中沢宏紀 (数理物質科学研究科 電子・物理工学専攻 博士前期1年)	末益崇教授(数理物質系) 都甲薫助教(数理物質系)
第21回 原子力国際会議 Student Paper Competition Best Paper Award	佐藤喬亮 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年) 八巻辰徳 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師(システム情報系)

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
日本原子力学会熱流動部会 優秀講演賞	八巻辰徳 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師(システム情報系)
Distinguished Presentation Prize at the International Workshop on Science and Patents 2013	本多隆利 (グローバル教育院 ヒューマンバイオロジー学位プログラム 一貫制博士1年)	古久保-徳永克男教授(生命環境系)
2012年度 英国応用言語学会 最優秀ポスター発表賞 2013年度 日本言語テスト学会 最優秀論文賞	長谷川佑介 (人文社会科学研究科 現代語・現代文化専攻 博士後期2年)	卯城祐司教授(人文社会系)
日本陸水学会第78回大会 優秀ポスター賞 日本陸水学会 第1回論文賞	荒居博之 (生命環境科学研究所 生命共存科学専攻 一貫制博士5年)	福島武彦教授(生命環境系)
NEXT Symposium "Membranome" for "Bio-Inspired Chemical Engineering" Best Poster Award	西田由香里 (生命環境科学研究所 生物資源科学専攻 博士前期2年)	市川創作教授(生命環境系)
フォーラム2013:衛生薬学・環境トキシコロジー 優秀若手研究者賞	吉田映子 (人間総合科学研究科 生命システム医学専攻 一貫制博士4年)	熊谷嘉人教授(医学医療系)
第57回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会 ベストプレゼンテーション賞	高瀬涼 (生命環境科学研究所 生物資源科学専攻 博士前期2年)	繁森英幸教授(生命環境系)
第52回電子スピンスイェンス学会 優秀発表賞	伊東一也 (人間総合科学研究科 フロンティア医科学専攻 修士1年)	盛武敬准教授 (現 産業医科大学産業生態科学研究所)
環太平洋産業連関分析学会 奨励賞	江藤 諒 (システム情報工学研究科 リスク工学専攻 2013年3月博士後期修了)	内山洋司教授(システム情報系) 岡島敬一准教授(システム情報系)
日本混相流学会 混相流シンポジウム2013 学生優秀講演賞	下西国治 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期2年) 田村尚也 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期2年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師(システム情報系)
第8回外国語教育メディア学会 学会賞論文賞	嶋田和成 (人文社会科学研究科 現代語・現代文化専攻 博士後期3年)	久保田章教授(人文社会系)
平成25年度日本スポーツ心理学会優秀論文奨励賞	夏原隆之 (人間総合科学研究科 コーチング学専攻 3年制博士3年)	浅井武教授(体育系)
2013年日本水泳・水中運動学会年次大会・ ヤマハ最優秀発表論文賞(口頭発表部門)	成田健造 (人間総合科学研究科 体育学専攻 博士前期2年)	椿本昇三教授(体育系)
〃 (ポスター発表部門)	小林啓介 (人間総合科学研究科 体育科学専攻 博士後期1年)	仙石泰雄助教(体育系)
応用物理学会 第2回 結晶工学未来塾 発表奨励賞	沼田諒平 (数理物質科学研究科 電子・物理工学専攻 博士前期2年)	末益崇教授(数理物質系) 都甲薫助教(数理物質系)
ISPACS 2013 Outstanding Student Paper Award	松本 亘 (システム情報工学研究科 コンピュータサイエンス専攻 博士前期2年)	亀山啓輔准教授(システム情報系)
日本マイクログラビティ応用学会第27回学術講演会 毛利ポスターセッション 最優秀賞	下西国治 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期2年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師(システム情報系)
情報処理学会 第157回 データベースシステム研究会 学生奨励賞	堂前友貴 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻 博士前期2年)	関洋平助教(図書館情報メディア系)
日本分析化学会関東支部 第10回茨城地区分析技術交流会優秀ポスター賞	田村尚也 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期2年) 柳澤博幸 (数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士後期1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師(システム情報系) 丹羽修連携大学院教授
日本女性学習財団賞奨励賞	須賀朋子 (人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 3年制博士 2年)	森田展彰准教授(医学医療系)
第82回全国盲学校弁論大会 全国大会 優秀賞	村田明由 (附属視覚特別支援学校高等部普通科1年)	_____

※所属、職名、学年は受賞時

附属駒場高等学校
養護教諭
早貸千代子さん

3回目の育休復帰をして、早9ヵ月。お休み中は子どもと一緒に硬筆を始めたり、赤ちゃん連れのフラダンスやフォークダンスで身体を動かしたりと、貴重な時間を過ごしましたが、2時間かかる通勤で落語の鑑賞を楽しんでいます。私のお気に入りには桂枝雀さん。ヘッドホン越しに聞こえてくる桂さんの話っぷりに引き込まれ、時間が過ぎるのがあっという間！静かな車内で、「くすっ」と笑ってしまうこともしばしばです。笑いがこらえきれないときには、先を見たい気持ちをぐっとこらえて、動画を止める…なんて時も。いつか寄席で思いっきり笑ってみたいです。



今回は、システム情報エリア支援室の杉野谷翠さんです。「筑駒事務にいらしたときはお世話になりました。翠さんの明るく元気なお人柄に助けられること多かったです」

教育推進部特命教授
大嶋建一さん

趣味は自転車に乗ることです。自宅のある稲荷前から赤塚公園を起点とする遊歩道に入り、通学の小学生から散歩の老夫婦まで、さまざまな方々とすれ違いながら、洞峰・二の宮・中央・松見公園を経て教育の森公園(大学構内)に入ります。道沿いには、生き茂るたくさんの木々や種々の植物が四季折々にドレスアップして、微笑みかけてくれますので心が和みます。つくばを生活の場として、早30年近くなり、その間の自転車走行距離は約12万kmで、地球を3周したことになります。今後は小学校からの走行距離を含めて、米寿までに“光が一秒間を進む距離30万km(地球の周長の7.5倍)”の自転車走行が目標です。



今回は、国際部留学生交流課の関本啓子さんです。「定年後も高大連携担当として働けるのは、広報担当時に来学した高校生に模擬講義の機会を作ってくくださったからです」

リ シ ー イ ッ セ イ



体育系准教授
嵯峨寿さん

30年ぶりにラグビー観戦熱にかかりました。映画『インビクタス』に刺激され、2011年にニュージーランドで開催されたW杯に出かけ、これを皮切りに本学ラグビー部の試合、日本代表とウェールズやオールブラックスとの国際試合(情報科学類2年福岡堅樹君がスタメン出場)、伝統の早明戦と重症化しています。W杯が2019年に日本で開催されるのは夢のようですが、現在の国立競技場が取り壊される前に、5万席のスタンドを筑波ブルーに染め上げ、学生、教職員、卒業生と家族も一緒に肩を組んで宣揚歌を歌えたら更に気分は最高でしょう。年に一度、しかも正月に国立競技場で同窓会ができるという大学は限られています。ぜひ叶えたいですね。



今回は、人文社会エリア支援室の生井栄さんです。「パスを、大学広報の仕事を支えながら一緒にやってきた生井栄さんに回します」

数理物質系准教授
山本洋平さん

共同研究のため、6月に1週間程ドイツのDuisburg-Essen大学を訪問しました。その際、家族より「Steiff」というドイツのメーカーのクマのぬいぐるみを買ってくるよう指令を受けました。どこに売っているのか分からないため、1ヶ月前からドイツ入りし共同研究を進めていた学生に聞いてみたところ、「エッセンにショップがあるのでは」とのこと。仕事後、学生とエッセン市内を探し回った末、ついにショップを発見、所望のティディベアを無事入手しました。帰国後調べてみると、国内では値段が4倍以上することが判明!娘はそのぬいぐるみをたいそう気に入っています。



今回は、人文社会系准教授の五十嵐沙千子さんです。「学生生活支援室で、教職員研修会3班つながりです。研修会後も班員で意見交換(飲み会)しています」

附属視覚特別支援学校教諭
嶋俊樹さん



5人家族の我が家では、帰省をはじめ旅行は大イベントです。昨秋、わんこそばで有名な岩手県盛岡市へ行きました。視覚障害教育に携わる方ならご存知の方が多い「桜井記念視覚障がい者のための手で見える博物館」を訪問することが目的でした。詳細を記したいところですが、名称のみご紹介にとどめます。さて、我が子の名前は、「あずみ野」「穂高岳」「聖岳」に由来し、山好きの方ならピンときます。帰省途中に安曇野にはよく立ち寄りますが、二つの山への登頂は今後の大きな目標でもあります。そして、このたび第4子を授かり無事誕生することを願うとともに、行ってみたい山・島が増える予感がします。

今回は、附属小学校教諭の平野次郎さんです。
「飲みながら互いの実践について語り合える同い年の方です。ピアニストと野球選手の顔を持つ頼れる同期です」

北アフリカ研究センター
生命環境エリア支援室
小屋一平さん



旅が好きです。遠く離れた場所に出かけて行くのも旅なら過去の遺構に身を置いて在りし日に思いを馳せるのもまた旅です。最近専ら国内旅行が多く、幕末から昭和にかけての近代化産業遺産を歩いてじっくり鑑賞するのが楽しみです。昨夏、長崎の池島を訪れました。本土から船で30分。2001年九州で最後に閉山した炭鉱の島。まだ住んでいる人もいるものの、会う人はほとんどなく、炭鉱団地の大部分は既につたに覆われていました。廃止が決まったつくばの官舎群も買い手がつかずまでしばらく廃墟と化すのでしょうか。蝉時雨だけが聞こえる中、ぼんやりとそんなことを考えてしまいました。

今回は、附属図書館情報サービス課の渡邊朋子さんです。
「気がつけば随分と長いおつきあいです。多彩な趣味をお持ちの優しい図書館のレファレンスのお姉さんです」

T S U K U B A C O M M U N I C A T I O N

人文社会系助教
留学生センター
鈴木華子さん



時間が取れると、日常とはかけ離れたところへ旅に出たくなります。この秋は、高校で交換留学をした際に、週末ホストファミリーをして下さっていたご家族のご令嬢が結婚するというので、10年ぶりにアメリカのメリーランド州に行って来ました。当時6年生だったホストブラザーも今では社会人になり、車で母校へ連れて行ってくださるまでに…。帰国してからは、すっかり遠くなってしまっていたホストファミリーに再会し、初めての留学生経験を支援してくれたホストファミリーへ感謝の気持ちと、今の自分の原点を振り返る機会に溢れる旅となりました。次はどこへ行こうかしら…。

今回は、菅平高原実験センター教授の町田龍一郎さんです。
「留学生を菅平に連れて行った際にお世話になりました。雪山がよく似合い、虫をこよなく愛す素敵な先生です」

人間エリア支援室
木村美里さん



11/1は1~3年目の若手職員46名で飲み会をしました。また、11/2には人事課と東京キャンパスの皆様と筑波山で登山・BBQを行いました。原田課長の焼き鳥が絶品でした！両方とも幹事として反省点は多々あるものの、多くの方から参加して良かったとの声をいただきました。上司でも先輩方でも同期でも後輩でも、普段あまりかかわることができない方々とお話できる機会はとても貴重だと思います。仕事でもプライベートでも、自分が困った時にはこうした人と人との繋がりが力になってくれたりするものですよね。今後も輪が広がるような場をつくっていきいかなあと思いますので、みなさん是非一緒に飲みましょう♪

今回は、病院総務部経営管理課の田中慶さんです。
「仕事のできるスーパーマンで、いつも興味深い話を聞かせてくださいます。私の尊敬する先輩のお1人です」

※所属、職名は2013年12月現在



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔茗溪会とは〕 一般社団法人茗溪会（江田昌佑理事長）は、筑波大学同窓会を母体とする社団法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校（東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など）の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪会がすぐれた社会貢献活動を行っている方や団体を顕彰し「茗溪賞」を贈る第12回顕彰式が、11月25日に茗溪会館で行われました。今年の受賞者は別記のとおりですが、そのうち本学学生の活動で顕彰された中川沙羅葉さん（生命環境学群生物資源学類3年）に、顕彰式の印象を語っていただきました。

茗溪会顕彰式に出席して思う 「ペイ・フォワード」を実行する

ふるさとつくば ゆいまつり実行委員会
中川 沙羅葉

秋も深まる好天の中、茗溪会館にて開催された第12回茗溪会顕彰式に参加しました。顕彰者の皆様は、老若男女問わずパワフルで明朗な方ばかりで、貴重なお話をたくさんお聞きすることができました。

私は、ふるさとつくば ゆいまつり実行委員会代表としてお招きいただきました。学生だけでなく、市民の方々と共に3年間続けてきた活動を顕彰していただいたことを誇りに思うと同時に、さらに工夫を重ね、つくば市を代表するおまつりの一つに創り上げていきたいという決意を新たにすることができました。

ところで、『Pay it Forward』（2000・米）という映画をご存知でしょうか。主人公である中学1年生の男の子が、「自分の手で世界を変えたら何をします?」という問いに対して「ペイ・フォワード」というアイデアを提案し、実行します。ペイ・フォワードとは、自分が受けた善意や親切を、他の3人の相手に渡していくというものです。つまり、自分が最後の受け取り手

(End-user)ではなく、次の人へのつなぎ手(Passer)になることで、社会全体の豊かさを増大させながら循環させるという考え方で。

今回の茗溪会から顕彰された皆様は、それぞれの精力的な活動を通してペイ・フォワードを実行すると同時に、ご自身の成長や学びにも全力を尽くしているように感じられました。また、ごなた

も原動力は「好き」や「やりたい」という純粋で強い気持ちでした。ゆいまつりも例外ではありませんが、継続していくにあたって資金や時間の制約、他の活動との両立の問題に直面します。それでも続けたいと思える好きなこと、信頼できる仲間や協力して下さる方々に恵まれ、実行する過程で築かれる意志や関係は、とても強固なものになります。それは、たとえ経済的価値に置き換えることができないとしても、人として忘れてはならない姿勢だとあらためて感じました。



今年の受賞者集合写真

お金だけでは解決できない問題が山積する昨今では、「独占ではなく共有の時代」とも言われています。分けあったり協働したり情報を伝えあえば、単独で活動するよりも効用が高まります。

このたび顕彰された方々のお話を聞くと、その活動は、震災復興支援やミャンマーでの職業指導、着物と親しむノウハウの提供など、「共有すること」を大切にしています。そんな、時代の最先端を牽引する全ての活動の盛り上がりとして成功を祈念して、結びとさせていただきます。



顕彰式で挨拶する中川さん



顕彰式で茗溪賞を贈る江田昌佑理事長



受賞した「ふるさとつくばゆいまつり」実行委員会の学生たち

社会貢献活動功労者
「茗溪賞」受賞者一覧
(順不同・敬称略)

団体

ふるさとつくば ゆいまつり実行委員会（代表学生 中川沙羅葉）
茨城県／彩の会（代表 岡田一枝）茨城県／埼玉県立所沢西高等学校被災地ボランティア実行委員会（代表生徒 本間徹、玉田尚子）埼玉県／NPO法人川越きもの散歩（代表 藤井美登利）埼玉県／神奈川工科大学防犯ボランティアサークル KAIT BLUE（代表学生 板橋幸音）神奈川県

個人

鈴木昭重（東京オリンピック聖火台保存活動）埼玉県
山地和家子（ミャンマーの障害者へ洋裁指導）大阪府
橋斌・橋満（「相馬野馬追」の甲冑修繕・製作）福島県
川口幸男（被災地に蓄音機持ち込み慰問）埼玉県
和家寛治（小倉百人一首かるたの出前授業）愛媛県



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔紫峰会とは〕 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

紫峰会報とは

「紫峰会報」は、主な会員である学生の保護者の皆さまに、紫峰会の活動実績や理事会の報告の他、学生の日常生活やクラブ・サークルでの活動の様子等を学生の目線で伝える、紫峰会の広報誌です。現在は年4回発行しています。この紫峰会報を会員にお届けするために、三系（文化系サークル連合会、芸術系サークル連合会、体育会）が主体となり、100を超える課外活動団体の全団体が一丸となって「紫

峰会報発送作業」を行っています。入会督促分も合わせて各号1万通以上発送しており、年間約5万通にも上ります。最近では筑波大学新聞や二学期制の案内など、大学からのお知らせも同封して会員に発送しています。大学の広報を行うという側面も強くなっており、大学と保護者を繋ぐ紫峰会報の重要性は更に大きなものとなっています。

紫峰会報の内容は主に、筑波大学関連・課

外活動団体・全大会のニュース、大学提供のコラム・就職情報、特集などです。ニュースと特集については学生が作っており、団体に寄稿を依頼したり、カメラを持って取材に行ったりして記事を書いています。また、これまでに何度か紫峰会報の内容に関するアンケートを実施しました。その結果、保護者は、学生の日常生活と就職・進路についての情報を欲しいと思っていることがわかり、内容に反映させてきました。

紫峰会報の紙面



紫峰会報の歴史と広報会議

紫峰会報は、紫峰会が誕生して3年後の1980年10月1日に創刊されました。編集は紫峰会職員を中心に、三系の役員が協力して行っていました。紫峰会報の題字は高橋進副学長（当時）によるもので、一時期を除いて現在まで使われています。編集に協力する三系の担当役員は、徐々にそれぞれの系の広報を担当する広報局長に定着し、1988年に「三系広報会議」が設置されました。現在は全学学類・専門学群代表

者会議の担当者も加わり、「学生広報会議」として活動しています。

広報会議では、紫峰会報の内容の検討や編集、取材の打ち合わせ、学生組織間の広報誌などの情報交換を行っています。学生が自分たちで内容を考えて作成し、自分たちの手で自分たちの学生生活を伝えることに主眼を置いています。また、広報に必要な知識や技術を得たり、他の組織の広報活動を知る機会にもなっています。



紫峰会報発送作業の様子

紫峰会報発送作業

紫峰会報創刊の頃、宛名は作業の都度手書きし、長3封筒に紫峰会報を3つ折りにして封入していました。そのため発送作業は相当大変なものでした。その後、宛名ラベルをパソコンからのプリントアウトに変えたり、封筒を角2封筒にして会報を折ることを無くしたり、封かんをセロハンテープからテープタックに変えたりするなど工夫し、参加者数の増加やノウハウが蓄

積することで効率よく作業を行えるようになり、作業時間を大幅に短縮することができました。かつては4時間以上もかかっていた作業が、現在では参加者200人程度で、1～2時間の作業となっています。発送費用についても、つくば市内で最大級の発送数ということもあり、格安の契約を結ぶことができ、大幅に削減できています。

おかげさまで子供が今春より貴大学にお世話になっております。先の雙峰祭のテーマはそのまま昨年からの子供の姿に重なります。弟宛てのメールにも、「筑波、最高」とあり、入寮以来一度も実家に帰宅していません。そのような状況下で、貴会報は大学や学生さんの様子の分かる貴重なものです。恐らく全国の保護者が似たような思いではないかと思っております。（在学生の母より）

※紫峰会報の創刊号からのバックナンバーは紫峰会WEBサイト (<http://www.shihoukai.gr.jp/>)にて公開しています。

Media Appearances

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(2013年10月～12月)

新聞記事一覧

記事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1 本学が開学40周年を迎え、「筑波大学開学40+101周年記念」式典を開催。式典には750人が参加。永田恭介学長の式辞の他、五輪メダリストによる鼎談、ノーベル賞受賞者による対談などが行われた	永田恭介学長 江崎玲於奈元学長 加藤澤男特命教授 本間三和子教授(体育系) 山口香准教授(体育系)	朝日・毎日・読売・ 日本経済・産経・東京・ 日刊工業・茨城(10.2)
2 長谷川秀彦学類長が、情報学群知識情報・図書館学類の教育の特色や今後の戦略を語る	長谷川秀彦教授(図書館情報メディア系)	日経産業(10.7)
3 「つくば国際戦略総合特区」の新規プロジェクトが追加承認。 ①生物医学資源を基盤とする医薬品・医療技術の開発②核医学検査薬の国産化 ③ロボット医療機器・技術の実用化と世界的拠点形成	本学	読売・茨城(10.12) 朝日(10.16,17) 日刊工業(10.18)産経(10.31)
4 大藏倫博准教授が考案した高齢者向けエクササイズ「スクエアステップ」が、全国各地に普及中	大藏倫博准教授(体育系)	朝日(10.18)
5 柳原英人准教授らのグループは、スパッタリング法を使って、良質なコバルトフェライト単結晶皮膜を作ることに世界で初めて成功	喜多英治教授(数理工学系) 柳原英人准教授(数理工学系) 新聞智彦助教(元数理工学系 現東北大学)	日刊工業(10.21)
6 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)と独ノルトライン・ヴェストファーレン(NRW)州は、サイバーダインのロボットスーツ「HAL」を使った実証試験を開始	山海嘉之教授(システム情報系) サイバーダイン サイバーダイン・ケア・ロボティクス	日刊工業(10.21) 日経産業(10.22)
7 陸上の実業団・学生対抗、男子走り高跳びで戸邊直人、女子100m障害で相馬絵里子、円盤投げで高橋亜弓が優勝	戸邊直人(体育専門学群4年) 相馬絵里子(同4年) 高橋亜弓(人間総合科学研究科2年)	毎日(10.20)
8 ▽知と技の空間 筑波大学40年①～⑤:国の新構想大学として設立され、改革を先導してきた本学の紹介	永田恭介学長 三好康郎副学長 江田昌佑元副学長 江崎玲於奈第5代学長 岩崎洋一第7代学長 梅村雅之教授(数理工学系 計算科学研究センター長) 河野一郎特命教授 前野哲博教授(医学医療系) 鶴田和太郎病院講師	茨城(10.29～11.3)
9 日比野研志研究員らのグループが、21世紀末に月平均気温と降水量がどのように変化するかをスーパーコンピュータで分析。東京の平均気温は3度程度上がり、約2000°。南西の気候になると発表	日比野研志研究員(生命環境系)	毎日(10.31)夕
10 本学が、患者から手術で摘出したがん組織などを集めた「つくばヒト組織バイオバンクセンター」を設立。研究機関へ実費で提供を開始	「つくばヒト組織バイオバンクセンター」 竹内朋代助教(医学医療系)	朝日(11.2)日本経済(11.5)茨城(11.6) 毎日(11.7)日経産業(11.8) 東京(11.13)産経(11.14)
11 柔道全日本学生体重別団体優勝大会で、本学男子が3年ぶり3回目の優勝	柔道部 増地克之准教授(体育系) 田中崇晃(体育専門学群1年) 西山雄希(同4年)	毎日・読売・東京・ 茨城・朝日(11.4)
12 全日本学生剣道優勝大会で、本学男子が、2年ぶり11回目の優勝	鍋山隆弘准教授(体育系)	毎日・朝日(11.5)
13 ▽患者を生きる2337～2341:慢性糸球体腎炎患者の出産を支えた海老原至准教授、成田光陽元教授。山縣邦弘教授の腎疾患患者へのアドバイス	海老原至臨床准教授(水戸済生会総合病院) 成田光陽元内科教授 山縣邦弘教授(医学医療系)	朝日(11.7～10)
14 喜多英治教授らの研究グループが、従来のものより安価で高性能なハードディスク駆動装置(HDD)用の新しい磁性材料を開発	喜多英治教授(数理工学系)	朝日(11.7～10)
15 第11回角川財団学芸賞に、斎藤環教授の「世界が土曜の夜の夢なら～ヤンキーと精神分析」	斎藤環教授(医学医療系)	毎日(11.7)夕
16 世界糖尿病デーに、附属病院で、指先からの微量な血液を採取するだけで診断できる装置を用いた糖尿病の検査や体組織測定、医師や看護婦による相談を行う	矢作直也准教授(医学医療系)	読売(11.9)朝日(11.13) 東京・茨城(11.14)
17 講道館杯全日本学生体重別選手権で、男子81kg級永瀬貴規が初優勝。73kg級栗野靖浩は準優勝	永瀬貴規(体育専門学群2年) 栗野靖浩(OB 了徳寺学園職)	朝日・毎日・茨城(11.10)
18 ▽インベーションに挑む④:内閣府の「最先端研究開発プログラム」で30人の科学者がプロジェクトを進めるが、そのうち2人が本学の教授	柳沢正史教授(分子行動科学研究コア) 山海嘉之教授(システム情報系)	日本経済(11.12)
19 高島瑛彦さんが、「第1回つくばショートムービーフェスティバル」グランプリを受賞	高島瑛彦(情報学群4年)	毎日・茨城(11.12) 東京(11.26)
20 ラグビー国際親善試合で、福岡堅樹が、スコットランド相手に2トライを奪う活躍	福岡堅樹(情報学群2年)	朝日・東京(11.11) 読売(11.13)
21 本年度文部科学省社会教育功労者に、手打明敏教授が選ばれた	手打明敏教授(人間系)	茨城(11.13)
22 江面浩教授らの研究グループが、花粉を受粉させる必要がなく、実もしっかりとした新タイプのトマトを開発	江面浩教授(生命環境系)	朝日・東京・茨城・日経産業(11.20) 日本経済(11.20)夕 日刊工業(11.26) 産経(11.29)読売(12.4)
23 「自動車通学安全モデル校」に、県内第一号、全国の大学として初めて選ばれた	清水一彦副学長	茨城(11.21)
24 延原肇准教授と学研は、辞書・事典に掲載された単語の関連を一目で分かりやすく表示する学習システムを開発	延原肇准教授(システム情報系)	日本経済(11.21)
25 本学キャンパスを発着点とするつくばマラソンが11月24日に開催されるにあたり、鍋倉賢治教授からのアドバイス	鍋倉賢治教授(体育系)	読売(11.21)
26 スーパーコンピューターの省エネ性能を競う世界ランキング「グリーン500」で、本学のHA-PACSが3位	計算科学研究センター	朝日(11.21)夕 産経(11.22)
27 本学と理科学研究所は、スパコン「京」が、米国の国際会議で、総合的な性能を評価する「HPCチャレンジ賞クラス1」3部門で1位、優れた性能や使いやすさを競う「同賞クラス2」も獲得したと発表	本学	茨城(11.23)
28 ▽パラダイムシフト:「工業化の限界。自然や誰かの生活をひどい目にあわせることなく、社会経済が持続的にまわっていく方向へ、経済全体の枠組みを転換できるかが課題」と田中洋子教授	田中洋子教授(人文社会学系)	毎日(11.25)夕
29 ▽認知症 MCIって?(上):認知症になるリスクが高いMCI(軽度認知障害)の高齢者は400万人。「認知症に進行させない支援方法を考え、検証したい」と朝田隆教授	朝田隆教授(医学医療系)	読売(11.26)
30 氏家恒太郎准教授ら、日米欧などの研究チームは、東日本大震災の巨大津波は、プレート境界にある粘土層が滑って引き起こしたことが判明したと発表	氏家恒太郎准教授(生命環境系)	朝日(12.6) 日本経済(12.6)夕
31 ▽人間発見①～⑤:ロボットスーツ「HAL」を開発した山海嘉之教授の半生	山海嘉之教授(システム情報系)	日本経済(12.9～13)夕

テレビ放送一覧

内容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1 全日本学生柔道体重別団体優勝大会	柔道部	NHKEテレ 「第15回全日本学生柔道体重別 選手権決勝」(11.9)
2 新講座「転ばぬ先の人生設計」	幅崎麻紀子准教授(ダイバーシティ推進室)	NHK総合 「おはよう日本」(11.29)

※所属、職名、学年は2013年12月現在

Event calendar

1 january

- 6日(月) 仕事始め
- 7日(火) 秋学期授業終了
- 18日(土) 大学入試センター試験(～19日)
- 20日(月) 第2回ⅢSシンポジウム
- 25日(土) 第7回つくば3Eフォーラム会議
MTGF(茗溪・筑波ランドフェスティバル)
- 30日(木) 大学院入学試験(2月期)(～31日)

2 february

- 3日(月) 秋ABCモジュール期末試験(～7日)
大学院入学試験(2月期)(～4日)
- 7日(金) 秋学期授業終了
北アフリカ研究センター
設立10周年記念特別セミナー
- 12日(水) 2013 BEST FACULTY MEMBER 表彰式
- 13日(木) 春季休業(～3/31)
- 15日(土) 第5回高校生アトライター大賞
表彰式(芸術専門学群)
- 19日(水) 大学院入学試験(2月期)合格発表
- 25日(火) 入学試験「前期/私費/編入(社)」(～26日)

3 march

- 1日(土) 附属駒場高等学校卒業式
- 7日(金) 合格発表「前期/私費/編入(社)」
- 12日(水) 入学試験「後期」
附属坂戸高等学校卒業式
- 14日(金) 附属視覚特別支援学校卒業式
附属大塚特別支援学校卒業式
附属桐が丘特別支援学校卒業式
- 15日(土) 附属中学校卒業式
附属聴覚特別支援学校卒業式
- 18日(火) 附属久里浜特別支援学校卒業式
- 19日(水) 附属高等学校卒業式
- 20日(木) 合格発表「後期」
附属小学校卒業式
附属駒場中学校卒業式
- 25日(火) 卒業式 大学院学位記授与式



